

宮城県文化財調査報告書第 251 集

# 入の沢遺跡ほか

—平成 27 ～ 30 年度埋蔵文化財発掘調査—

入の沢遺跡・市川橋遺跡・

坂ノ下浦 I 遺跡・彦右エ門橋窯跡近接地

令和 2 年 3 月

宮城県教育委員会

# 入の沢遺跡ほか

—平成 27～30 年度埋蔵文化財発掘調査—

入の沢遺跡・市川橋遺跡・

坂ノ下浦 I 遺跡・彦右エ門橋窯跡近接地

## 序 文

地域の歴史文化の保護・活用に、住民や県民の方々のみならず全国的な関心が高まる一方で、埋蔵文化財は依然として開発行為や自然災害による亡失の危機に直面しています。本県においても先の東日本大震災以降、急増する開発行為と埋蔵文化財保護の両立が課題となっており、復興や県民生活の充実を第一としつつ、国民共有の財産である文化財を将来へ継承するための努力をしているところです。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち、平成27～30年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査の成果と、開発行為に先立って確認調査を実施した遺跡の成果について収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

令和2年3月

宮城県教育委員会

教育長 伊東 昭代

## 例 言

1. 本書は、宮城県が平成 27～30 年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課（平成 27～29 年度当時）・文化財課が実施した開発事業や遺跡保護に係わる入の沢遺跡・市川橋遺跡・坂ノ下浦 I 遺跡・彦右エ門橋窯跡近接地の発掘調査の報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から報告書刊行に至る一連の作業については、遺跡の保存を前提として、性格や構成を把握することを目的としたほか、調査原因となった開発行為に係わる機関の依頼を受けて、実施したものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発行為に係わる機関と地元教育委員会から多大な御協力をいただいた。また、報告書作成にあたっては、次の方々・機関からご指導・ご助言をいただいた（敬称略）。

大衡村教育委員会  
栗原市教育委員会（千葉長彦・大場亜弥・安達訓仁）  
宮城県多賀城跡調査研究所
4. 各遺跡の位置図は、国土地理院発行 1/25,000 の地形図を複製し、宮城県遺跡地図情報（平成 30 年 5 月 18 日時点）を重ねて作成した。
5. 各遺跡の測量座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SF：土塁跡 SI：竪穴建物跡  
SK：土坑 SU：遺物集中 SX：積み土・包含層・炭堆積層
7. 土色の記述については、農林水産省農林水産技術会議事務所『新版標準土色帖 2014 年度版』（小山・竹原 1973）を用いた。
8. 土器実測図において、土師器の黒色処理はドットのスクリーントーンで表現した。また、須恵器は断面をグレーで表現した。
9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、下記の職員が執筆し、齋藤和機と初鹿野博之が編集した。

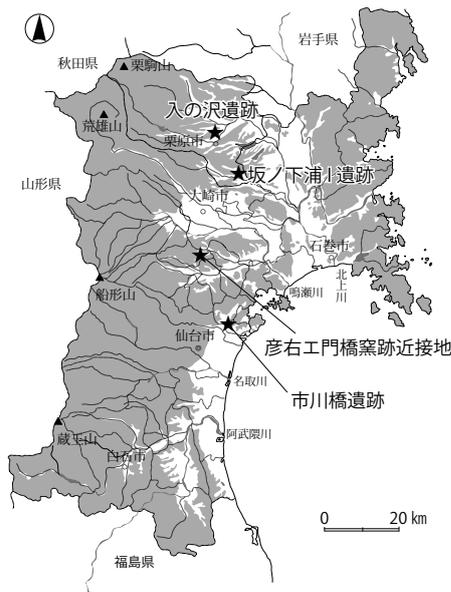
平成 27～30 年度発掘調査の概要：齋藤和機  
入の沢遺跡：齋藤和機・鈴木啓司・高橋透（宮城県多賀城跡調査研究所）  
市川橋遺跡：初鹿野博之・須田正久（H27・28 群馬県派遣）  
坂ノ下浦 I 遺跡・彦右エ門橋窯跡近接地：初鹿野博之
10. 発掘調査の記録と出土遺物については、宮城県教育委員会が保管している。ただし、坂ノ下浦 I 遺跡の平成 29 年度調査分については栗原市教育委員会が保管している。なお、本書に係わる著作権については、宮城県教育委員会が保有する。

# 目 次

平成 27 ～ 30 年度発掘調査の概要 .....	1
I. 入の沢遺跡.....	2
1. 調査に至る経緯 .....	2
2. 遺跡の位置と環境 .....	4
3. A：平成 27 年度発掘調査 .....	4
4. B：平成 28 年度発掘調査の成果 .....	9
5. C：平成 28 年度遺跡保護 .....	10
II. 市川橋遺跡.....	18
1. 遺跡の概要 .....	18
2. 調査に至る経緯と調査経過 .....	19
3. 基本層序 .....	21
4. 発見された遺構と遺物 .....	21
5. まとめ .....	26
III. 坂ノ下浦 I 遺跡.....	30
1. 遺跡の概要と調査に至る経緯 .....	30
2. 調査の方法と経過 .....	31
3. 発見された遺構と遺物 .....	31
4. まとめ .....	34
IV. 彦右エ門橋窯跡近接地.....	42
1. 調査に至る経緯 .....	42
2. 調査の概要 .....	42

抄録

## 平成 27～30 年度発掘調査の概要



遺跡の位置

当教育委員会では、埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を受けて、道路建設・圃場整備事業・住宅建築等に係わる発掘調査を実施した。これらのうち本書には、平成 27・28 年度の入の沢遺跡（栗原市）、平成 27 年度の市川橋遺跡（多賀城市）、平成 30 年度の坂ノ下浦Ⅰ遺跡（栗原市）および彦右工門橋窯跡近接地（大衡村）の調査成果を収録している。以下、各遺跡の概要を述べる。なお、重要遺跡範囲確認調査は東日本大震災以降休止しており、復旧・復興事業に注力している。また、平成 24 年度以降、復興交付金事業や被災住宅再建等への対応は復興交付金を活用し、それ以外の開発事業に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金で対応している。

このほか、平成 27～29 年度の 3 ケ年で宮城県遺跡地図の GIS 整備事業を行い、ウェブサイトに掲載して周知・公開を行った。

### 【入の沢遺跡】

栗原市築館に所在する遺跡で、これまでの調査により遺跡南西部で古墳時代前期の大溝と材木堀に囲まれた集落域が確認されている。集落域の竪穴建物跡からは珠文鏡など古墳副葬品にみられる遺物が多数出土し、4 世紀後半頃のヤマト政権勢力の北限域を示す事例として平成 29 年 10 月 13 日に国の史跡に指定された。

当報告書に係わる発掘調査は、平成 27 年度に一般国道 4 号線築館バイパス建設計画の変更協議のため、集落域北側にあたる遺跡北東部を対象に分布・確認調査を実施した。その結果、古墳時代後期から古代とみられる横穴墓群、古代の土塁跡、溝跡、掘立柱建物跡、中近世とみられる塚が分布していることが明らかとなった。平成 28 年度には、銅鏡など最も豊富に遺物が出土した A 区 SI13 竪穴建物跡の構造等を把握する目的で追加調査を実施した。追加調査終了後、同年度中に遺跡保護のため埋戻しを実施した。

### 【市川橋遺跡】

多賀城市市川に所在する遺跡で、特別史跡多賀城跡南西に広がる。縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、古代には方格地割の都市域が形成されたことで著名である。当報告書に係わる発掘調査は遺跡北西部（多賀城西門前面）の遊水地造成計画に伴うもので、調査の結果、弥生時代中期中葉（柵形囲式期）の土器が多数出土した。

### 【坂ノ下浦Ⅰ遺跡】

栗原市瀬峰に所在する縄文・古代の遺跡で、古墳時代～古代の集落跡として知られる大境山遺跡の西側の丘陵に立地する。丘陵斜面で太陽光発電所の建設計画があり、確認調査を実施した結果、斜面に立地する 9 棟の竪穴建物跡などが検出され、平安時代を中心とする集落跡であることが明らかになった。

### 【彦右工門橋窯跡近接地】

調査地点は大衡村大衡字萱刈場に位置し、彦右工門橋窯跡南西部に枝分かれした丘陵の先端部にあたる。当該地点が国道 4 号線大衡道路の計画範囲に含まれることから、遺構の有無を確認するために試掘調査を実施した。その結果、丘陵の延長とみえた地形は、近現代の盛土によるものと判明し、遺跡の範囲が調査地点まで及ばないことが判明した。

## I. 入の沢遺跡

- 【調査要項】** (A：平成 27 年度発掘調査，B：平成 28 年度発掘調査，C：平成 28 年度遺跡保護)
- 遺跡名：入の沢遺跡（宮城県遺跡地名登録番号：41071・遺跡記号：YC）
- 所在地：栗原市築館城生野字入の沢・峰岸
- 調査原因：A 一般国道 4 号線築館バイパス建設，B 重要遺跡確認，C 遺跡保護
- 調査主体：宮城県教育委員会
- 調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
- 担当調査員：A 高橋栄一，豊村幸宏，中澤淳，遠藤則靖，生田和宏，小野章太郎，村上裕次，熊谷宏規，長内祐輔，鈴木啓司，傳田惠隆，齋藤和機，黒田智章  
B 村田晃一，遠藤則靖，村上裕次，鈴木啓司，高橋洋彰，傳田惠隆，齋藤和機，下山貴生，山口貴久，佐藤渉  
C 生田和宏，村上裕次，鈴木啓司
- 調査期間：A 平成 27 年 10 月 5 日～12 月 14 日  
B 平成 28 年 8 月 1 日～8 月 5 日  
C 平成 28 年 11 月 21 日～平成 29 年 2 月 28 日
- 調査対象面積：A 13,000㎡，B 100㎡，C 7,000㎡
- 調査面積：A 180㎡，B 100㎡
- 調査協力：栗原市教育委員会，国土交通省仙台河川国道事務所

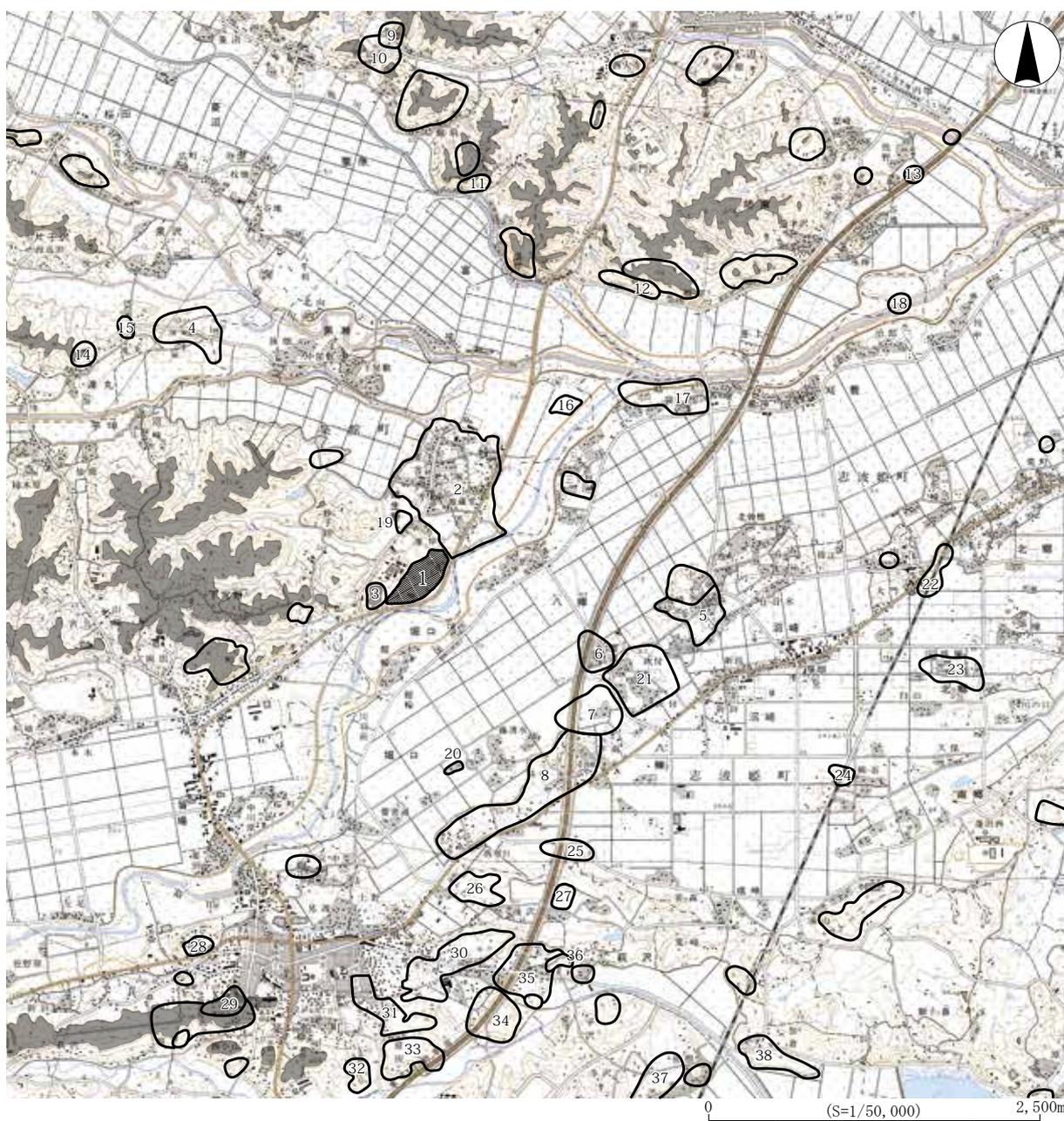
### 1. 調査に至る経緯

栗原市築館赤坂から城生野に至る総長約 7 km の一般国道 4 号線築館バイパスの建設に先立ち，宮城県教育委員会は平成 15 年より計画路線内に所在する 8 遺跡の発掘調査を順次実施してきた。このうち，北側終点にあたる入の沢遺跡南西部を平成 26 年 4 月から本発掘調査したところ，古墳時代前期の大溝跡・盛土遺構（土塁）・材木堀跡に囲まれた多数の竪穴建物跡を発見した。焼失した竪穴建物跡からは，豊富な土器や鉄製品のほか，珠文鏡など銅鏡 4 面と，管玉・勾玉・ガラス小玉・垂飾品などが多数出土した。冬季に入ったため，発掘調査は同年 12 月に一時中断することとなった。

宮城県教育委員会と栗原市教育委員会は，発掘調査を中断するまでに得た上述の成果から，本遺跡が歴史上極めて重要な遺跡であることを認識するに至った。そこで，平成 27 年 1 月に事業者である国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所（以下，国交省という）に対して遺跡の現状保存を要望し，これ以降，保存協議を重ねることとなった。平成 27 年 10～12 月には，計画路線を集落域の東側へ変更した場合を想定し，本遺跡北東部を対象に，遺跡への影響等を把握するための確認調査（A：平成 27 年度調査）を実施した。

こうした中，本発掘調査を実施した区域は，宮城県考古学会，日本考古学協会による保存要望書の提出や，東北学院大学アジア流域文化研究所の公開シンポジウム等，県内外の関心の高まりを受けて，平成 27 年 11 月 2 日の栗原市長の定例記者会見で保存する意向が示された。平成 28 年 5 月には文化庁・文化審議会文化財分科会委員による視察がなされ，これらを受けて，関係機関との保存協議において，現状保存と国の史跡指定に向けて調整を図る方針となった。

宮城県教育委員会は，本遺跡の評価をまとめるにあたり，銅鏡をはじめ多数の遺物が出土した SI13 竪穴建物跡の追加調査を実施し（B：平成 28 年度調査），その終了後には，遺跡の保存方針に沿って調査区域の埋戻しを行った（C：平成 28 年度遺跡保護）。さらに，平成 28 年 12 月には追加調査を踏まえて「入の沢遺跡—一般国道 4 号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅳ—」（宮城県 2016）を刊行した。こうした経緯を経て，本遺跡は平成 29 年 6 月に文化審議会で史跡指定の答申がなされ，10 月 13 日



No	遺跡名	立地	種別	時代	No	遺跡名	立地	種別	時代
1	入の沢遺跡	丘陵	集落・横穴墓	古墳前後・奈良・平安・中世・近世	20	堂の沢遺跡	段丘	集落	古代
2	伊治城跡	段丘	城柵・集落・墓	旧石器・古墳前・後・奈良・平安	21	吹付遺跡	段丘	集落	奈良・平安
3	大仏古墳群	丘陵	墓	古墳後・奈良	22	大門遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中世
4	長者原遺跡	丘陵	集落	古墳中・奈良・平安	23	狐塚遺跡	段丘	窯	奈良
5	淀遺跡	段丘	集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	24	熊谷遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安
6	鶴ノ丸館跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世	25	山ノ上遺跡	段丘	集落	縄文・奈良
7	宇南遺跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世	26	大天馬遺跡	段丘	集落	奈良・平安
8	御駒堂遺跡	段丘	集落	縄文・弥生・古墳前後・奈良・平安・近世	27	後沢遺跡	段丘	集落	奈良・平安
9	栗原寺跡	丘陵	寺院	平安	28	青野遺跡	段丘	散布地	古代
10	尾松遺跡	丘陵	散布地	古代	29	薬師山北遺跡	丘陵	散布地	古墳前
11	大沢横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後・奈良	30	下萩沢遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安
12	姉齒横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後・奈良	31	源光遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
13	佐野遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安	32	高田山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
14	中島遺跡	丘陵	散布地	平安	33	原田遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
15	泉沢A遺跡	丘陵	集落	奈良・平安	34	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
16	城下遺跡	自然堤防	集落	奈良・中世・近世	35	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安
17	刈敷袋遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代	36	鱒沢遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安・中世
18	刈敷治郎遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代	37	照越台遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古墳・古代
19	基内屋敷遺跡	段丘	散布地	縄文・古代	38	嘉倉貝塚	丘陵	集落・貝塚	縄文・弥生・奈良・平安

図版1 入の沢遺跡の位置と周辺の遺跡

に国の史跡指定が告示された。

## 2. 遺跡の位置と環境

入の沢遺跡は宮城県栗原市築館字城生野入の沢・峯岸の、奥羽山脈から東に派生した築館丘陵上に所在し、南を一迫川、北を二迫川によって挟まれている。遺跡はこの丘陵の南東先端部に立地し、標高24～49mで、南北430m・東西450mに広がる。南東側は迫川水系によって形成された沖積低地（迫川低地）に面し、遺跡のある丘陵上と直下を走る国道4号との比高は23～26mである。

周辺には旧石器時代から近世にかけての遺跡が多く所在する。ここでは、本遺跡と係わる古墳時代と古代の遺跡について概観する。

古墳時代の遺跡には伊治城跡（2）、長者原遺跡（4）、淀遺跡（5）、鶴ノ丸館跡（6）、宇南遺跡（7）、御駒堂遺跡（8）、薬師山北遺跡（29）、大仏古墳群（3）、大沢横穴墓群（11）、姉齒横穴墓群（12）がある。これらのうち、前期には伊治城跡で方形区画溝跡や古墳周溝、土坑墓を伴う周溝、竪穴建物跡が確認され、方形区画溝跡では土師器とともに続縄文土器が出土している。また、鶴ノ丸館跡で方形周溝や円形周溝、竪穴建物跡、宇南遺跡で方形周溝、竪穴建物跡、御駒堂遺跡で竪穴建物跡が確認されている。

中期の周辺部における調査事例は減少し、長者原遺跡で竪穴建物跡が確認されているのみである。後期も大沢横穴墓群、姉齒横穴墓群といった横穴墓群の造営はみられるが、集落などは確認されていない。なお、本遺跡の西側には円墳を主体とする大仏古墳群があるが、時期などの詳細は不明である。

古代の遺跡は周辺で多数認められる。8世紀前半代には本遺跡の南約2kmに位置する御駒堂遺跡（8）、山ノ上遺跡（25）で関東系カマドと土師器を伴う竪穴建物跡が多数確認され、律令政府主導で大規模な入植があったことが判明している。8世紀後半代になると、本遺跡の北側に隣接して伊治城跡（2）が造営される。伊治城跡は「続日本紀」で、神護景雲元（767）年に古代東北経営を目的として造営された城柵とされ、これまでの調査により、正殿、前殿、北殿、脇殿が規則的に配置された政庁と、それを取り囲む内郭、外郭からなる三重構造を持つことが判明している。この遺跡は国内初となる弩の「機」が出土したことで知られる。周辺には、長者原遺跡（4）、淀遺跡（5）、鶴ノ丸館跡（6）、宇南遺跡（7）、佐野遺跡（13）、城下遺跡（16）、吹付遺跡（21）、大門遺跡（22）、大天馬遺跡（26）、下萩沢遺跡（30）、源光遺跡（31）、原田遺跡（33）、木戸遺跡（34）、佐内屋敷遺跡（35）などの集落遺跡がある。

## 3. A：平成27年度発掘調査

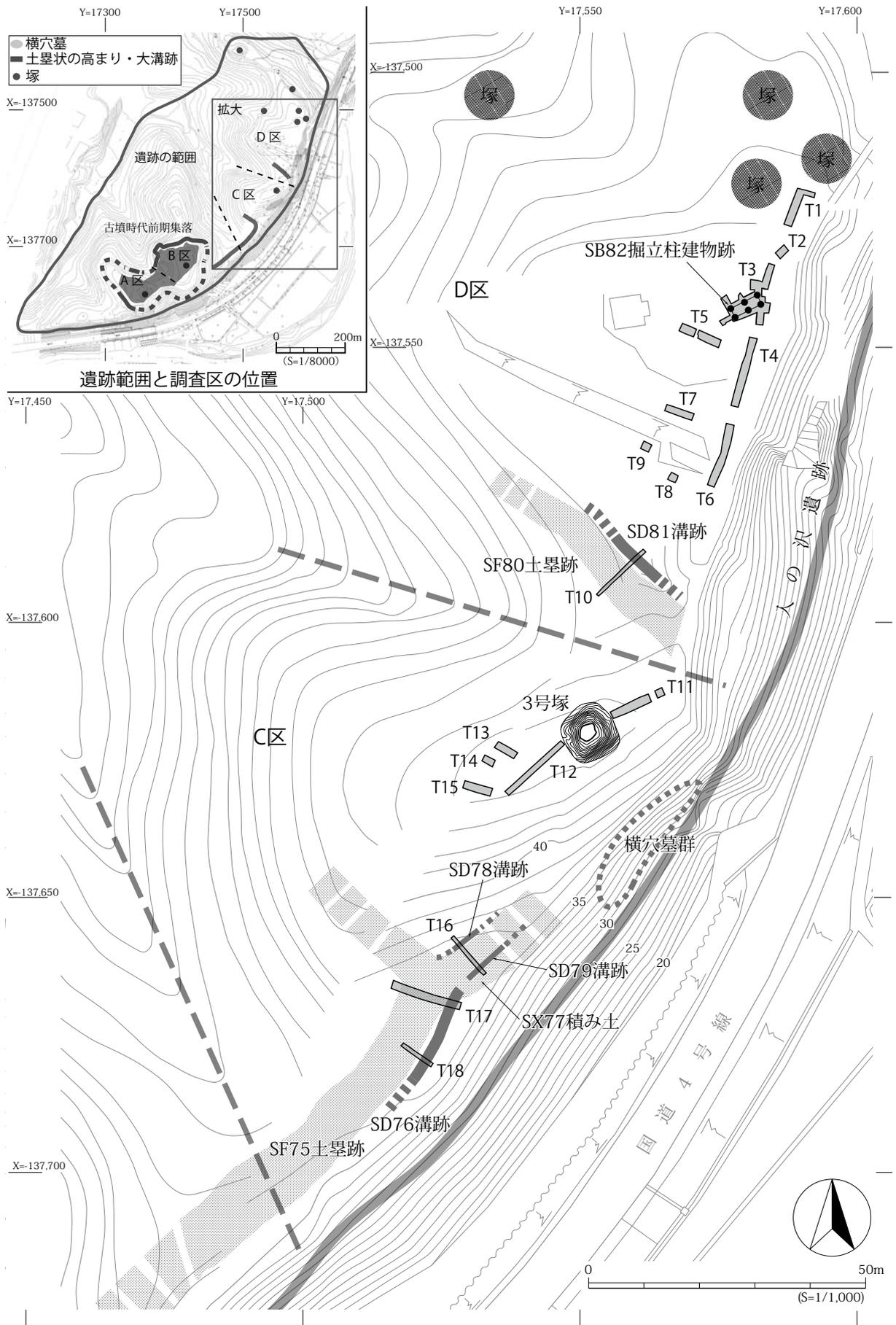
### （1）調査の経過と方法

平成27年度発掘調査は、分布調査で塚・土塁状の高まりを発見した遺跡北東部の丘陵東端部尾根や緩斜面を対象として、遺構の分布・内容等を把握する目的で実施した。尾根は西側から入る沢を挟んで大きく2つに分かれるため、調査区をC・D区に分けることとし、北側のD区から調査を開始した。（A・B区：平成26年度調査区）。両調査区の現況は雑木林であり、人力による竹や低木の伐採を行ったうえで、土塁等の地形がみられる場所や尾根上の平坦面を中心に、北から18本（T1～T18）のトレンチを設定し、約180㎡を調査した。

記録作成にあたっては、トレンチや遺構の測量にCUBIC社製電子平板システム「遺構くん」を用いた。また、断面図は主に縮尺1/20の手実測で作成し、写真撮影には、デジタル一眼レフカメラ（Canon社製D60、1,800万画素）を使用した。

### （2）基本層序

C・D区の基本層は4層に大別され、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が黒褐色シルトによる旧表土、Ⅲ・Ⅳ層は地山でⅢ層が黄褐色粘土質シルトのローム層、Ⅳ層が黄橙色の岩盤である。



図版2 入の沢遺跡調査区とトレンチ配置図

No.	遺構種別	位置	調査
75	SF 土塁跡	C区	一部断割り
76	SD 溝跡	C区	一部断割り
77	SX 積み土	C区	一部断割り
78	SD 溝跡	C区	一部断割り
79	SD 溝跡	C区	一部断割り
80	SF 土塁跡	D区	一部断割り
81	SD 溝跡	D区	一部断割り
82	SB 掘立柱建物跡	D区	検出
3号塚			C区 検出・測量

表1 C・D区遺構番号一覧

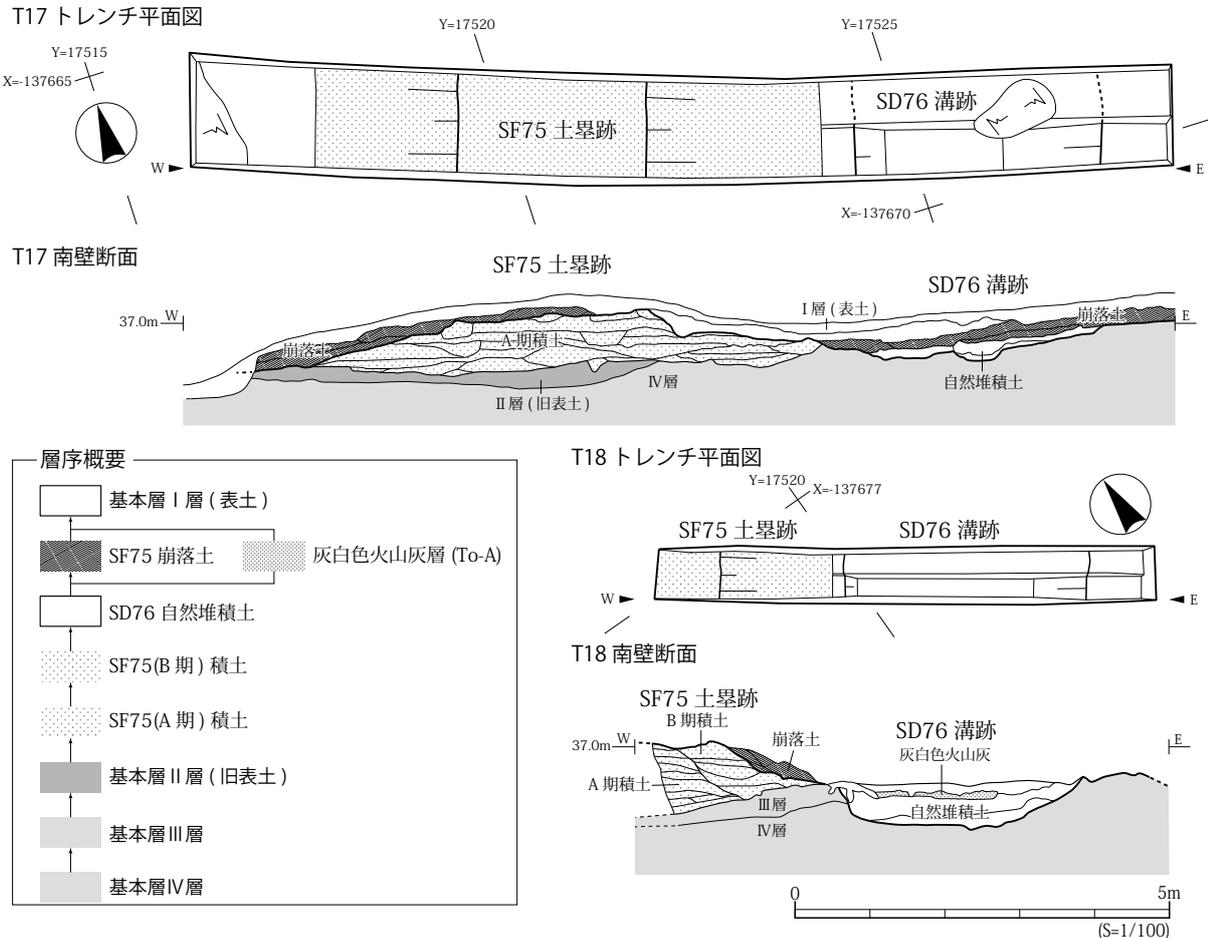
(3) 発見された遺構と遺物

事前の分布調査によって確認していた塚5基と土塁跡2条、横穴墓5基のほか、土塁跡と緩斜面の断割り・トレンチ調査によって新たに積み土1箇所、溝跡4条、掘立柱建物跡1棟、ピットを確認した。以下、発掘調査によって確認した遺構の概要を調査区ごとに述べる。なお、それらの遺構番号はA・B区から連続して付番した(表1)。塚についてもA・B区と同様に独立した番号としている。

<C区の調査>

【SF75 土塁跡】(図版2・3, 写真図版1・2)

分布調査によって高まりを確認した。遺跡南東部のB区東側から丘陵尾根上を北東方向に延びており、C区丘陵頂部の手前から北西方向へ概ね直角に屈曲する。北東方向部分では東側を土塁に沿ってSD76溝跡が延びる。確認した高まりの長さは約79mで、北東方向部分で約66m、北西方向部分で13mである。断割りを2箇所(T17・T18)で行ったところ、T18では2時期分の盛土を確認し(A→B期)、部分的に補修が加えられている。A期はT17で基底幅6.7m、上部幅2.5m、高さ0.9mが遺存しており、断面形は台形を呈する。基本層Ⅱ層(旧表土)上面を削ったうえで、基本層Ⅲ・Ⅳ層(地山)を主体とする土を厚さ0.1~0.2m単位で版築状に積み土したとみられ、東側に並行するSD76溝跡の掘削土を用いたと考えられる。B期はA期積み土東側の崩落土を除去したうえで、A期と同様に厚さ0.1~0.2m単位で版築状に積み土されている。遺物はA期積み土から土師器片が出土している。



図版3 SF75土塁跡・SD76溝跡断面図1(T17・T18トレンチ)

## 【SD76 溝跡】(図版 2・3, 写真図版 1・2)

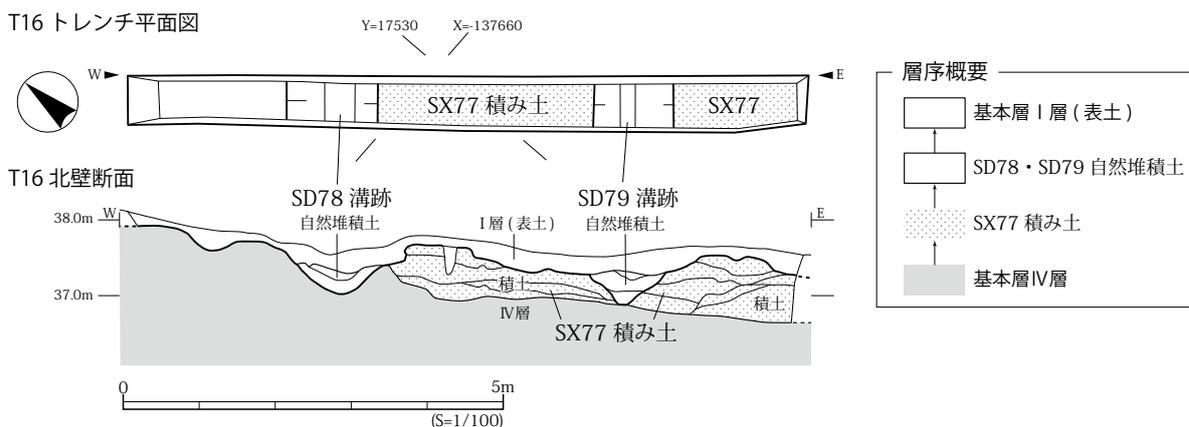
SF75 土塁跡東側に沿って延びる溝跡である。確認した長さは T17・T18 間の約 13 m で、さらに南北に延びている。断面形は皿形で、規模は幅 3.3 m、深さ 0.7 m である。堆積土はにぶい黄褐色を主体とする粘土質シルトで、自然堆積である。T18 では中層に灰白色火山灰 (To-A: 10 世紀前葉) が認められ、土塁崩落土がその上に堆積する。遺物は堆積土から土師器片が出土している。

## 【SX77 積み土】(図版 2・4, 写真図版 2)

SF75 土塁跡北側の屈曲点から、丘陵尾根に沿って北東方向に延びる積み土である。SF75 の延長の可能性もあるが、関係を把握していないため、SX77 積み土として報告する。規模は、北側と東側の地形的な制約からみて、長さが最大でも約 12 m、幅は 5.4 m～10.0 m 程と思われる。高さは最大で 0.9 m 遺存しており、基本層Ⅲ・Ⅳ層 (地山) 主体の土が厚さ約 0.2～0.3 m 単位で版築状に積み上げられている。遺物は出土していない。

## 【SD78・SD79 溝跡】(図版 2・4, 写真図版 2)

南北方向に平行して延びる溝跡で、SD78 が西側、SD79 が東側に位置する。SD78 は断面形が椀形で、規模は幅 1.2m、深さは 0.4m である。堆積土は灰黄褐色を主体とするシルトの自然堆積である。SD79 は断面形が逆三角形で、規模は幅 1.0 m、深さ 0.5 m である。堆積土は灰黄褐色を主体とするシルトの自然堆積である。遺物は出土していない。



図版 4 SX77 積み土・SD78 溝跡・SD79 溝跡 (T16 トレンチ)

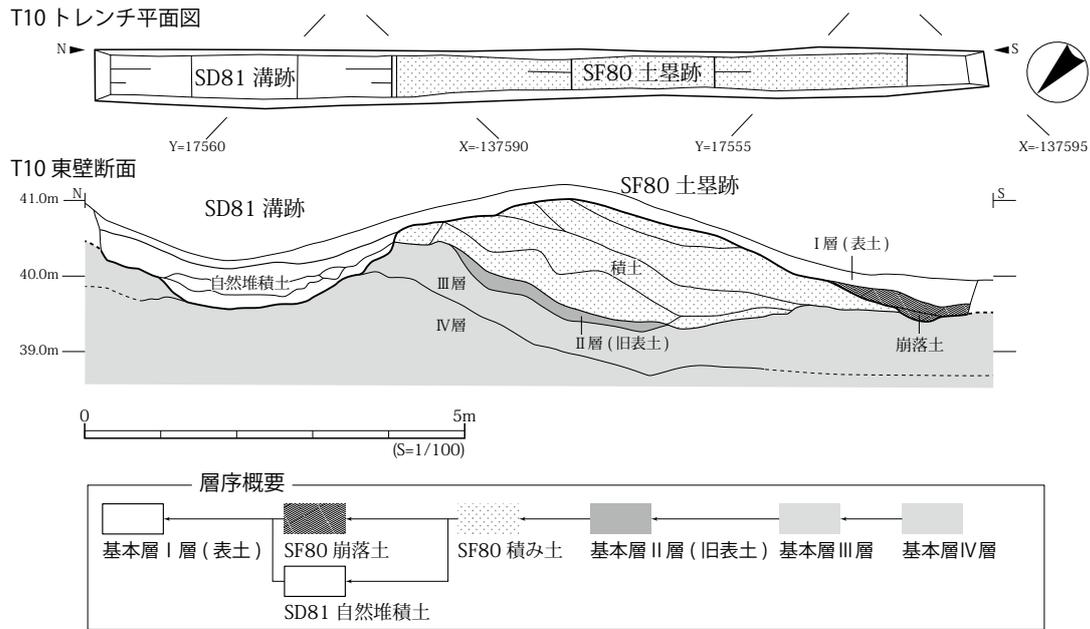
## 【3号塚】(図版 2)

分布調査によって確認した塚で、現況測量を行った。基底部分は方形を呈し、規模は一辺 10 m、高さは塚基部から約 1.1 m である。塚裾部に設定した T11・T12 では周溝等は確認していない。

## 〈D 区の調査〉

## 【SF80 土塁跡】(図版 2・5, 写真図版 2)

分布調査によって高まりを確認した。D 区南側で丘陵尾根に直交し東西方向に延び、北側では土塁に沿って SD81 溝跡が延びる。確認した高まりの長さは約 35 m である。良好に遺存する中央部 (T10) でみると、基底幅 7.1 m、高さ 1.4 m が遺存しており、断面形は逆椀形である。基本層Ⅱ層 (旧表土) 上面に基本層Ⅲ・Ⅳ層 (地山) を主体とする土が、北側から 0.4～0.7 m 単位で積み上げられている。積み土の中層は 50cm 前後の地山ブロックを多く含む。構築にあたっては、北側に平行する SD81 溝跡の掘削土を用いたとみられる。遺物は出土していない。



図版 5 SF80 土塁跡・SD81 溝跡 (T10 トレンチ)

【SD81 溝跡】 (図版 2・5, 写真図版 2)

SF80 土塁跡の北側に沿って延びる溝跡である。本溝の総長は不明であるが、SF80 土塁跡と平行していることから 35 m 前後は延びていた可能性がある。断面形は皿状で、規模は幅 2.3 m、深さ 0.4 m である。堆積土は褐色の粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

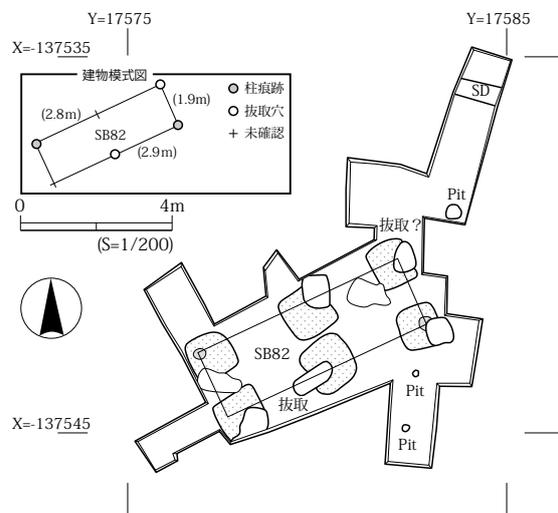
【SB82 掘立柱建物跡】 (図版 2・6, 写真図版 3)

D 区尾根上の丘陵頂部で確認した東西 2 間×南北 1 間の東西棟建物跡である。柱穴は 6 個あり、そのうち南東隅柱、北西隅柱で柱痕跡、北東隅柱と南側柱列の中央柱穴で抜取穴を検出した。建物の規模は柱痕跡・抜取穴の中心を柱中心と推定すると、桁行が北側柱列で約 5.8 m、梁行が東側柱列で約 1.7 m である。方向は北側柱列で E - 27° - N である。

柱掘方の平面形は隅丸形状を呈し、規模は一辺が 1.1 m ~ 1.4 m である。埋土は地山ブロックを多く含む明黄褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は平面形が円形で、規模は直径約 0.3 m である。遺物は出土していない。

(4) まとめ

- 1 分布調査によって横穴墓 5 基、塚 5 基と土塁跡 2 条を認め、発掘調査では積み土 1 箇所、溝跡 4 条、掘立柱建物跡 1 棟、ピットを確認した。また、土師器片が出土した。
- 2 SF75 土塁跡は SD76 溝跡と一体であったと考えられる。SD76 溝跡は堆積土に灰白色火山灰 (To-A: 10 世紀前葉) が認められ、SF75 積み土と SD76 堆積土から土師器が出土していることから、古代に機能していたとみられる。
- 3 SB82 掘立柱建物跡は、出土遺物がなく年代は不明であるが、柱穴掘方の規模や形状から、古代のものとおきたい。



図版 6 SB82 掘立柱建物跡 (T3 トレンチ)

- 4 SF80 土塁跡は、積み土の様相が SF75 土塁跡と異なっており、構築時期などに違いがある可能性が考えられる。
- 5 C・D 区では古墳時代前期の遺構・遺物は確認されなかったが、横穴墓、土塁跡、溝跡、掘立柱建物跡や塚など、古墳時代後期から中近世の遺構が存在することが判明した。

#### 4. B：平成 28 年度発掘調査の成果

##### (1) 調査の経緯

平成 28 年度の発掘調査は、平成 26 年度の本発掘調査によって、銅鏡や鉄製品、玉類、土師器など豊富な遺物が出土した A 区 SI13 竪穴建物跡（図版 10）を対象とした。SI13 の調査は、床面施設の検出を終了した段階で中断し、平成 27 年度は遺跡保存の協議が行われていた。しかし、史跡指定を目指すにあたって SI13 の床面施設の実態や改修の有無など、詳細な情報が入の沢遺跡の評価に大きく係わると判断し、平成 28 年度にこれらの情報を得ることを目的として追加調査を実施した。

##### (2) 調査の概要

今回の調査は SI13 竪穴建物跡床面施設の確認を目的として、支柱穴・土坑・溝等の検出を行った。その成果は県 245 集に収録しており、同書第 42 図に示したとおりである。本書は回収した SI13 堆積土水洗篩によって発見した玉類・炭化米等について報告する。また、平成 26 年度の調査で表土や遺構確認時に出土した遺物のうち、特徴的なものについても本書に収録した。

#### 【SI13 竪穴建物跡出土遺物】（図版 7、写真図版 4）

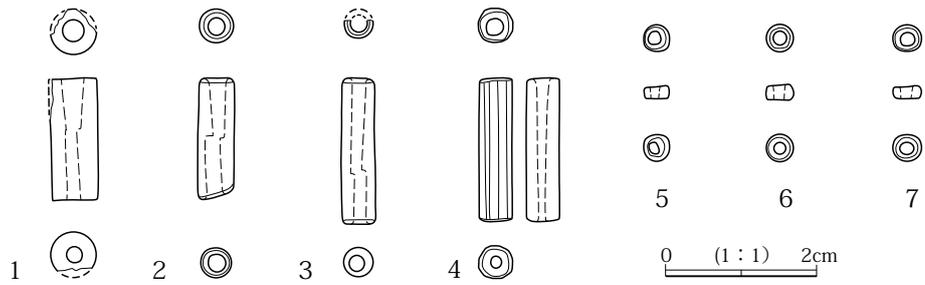
竪穴建物内堆積土の水洗篩によって、玉類と植物遺存体を発見した。玉類の内訳は管玉 7 点、白玉 3 点、ガラス玉 11 点で、このうち管玉 4 点（図版 7-1～4）と白玉 3 点（同-5～7）を図示し、ガラス玉は完形のもの 10 点を写真で掲載した（写真図版 4-8～17）。管玉は滑石（1）、緑色凝灰岩（2・3）、鉄石英（4）を母材とし、大きさは長さ 16.2～19.4mm、直径 4.3～5.9mm の範囲に収まる。穿孔方法は両面穿孔（1～3）と片面穿孔（4）に分けられ、3 は孔内に穿孔具の回転痕が残り（写真図版 4-3b）、4 は 2 度穿孔された痕跡が確認できる。また、2～4 の端面は穿孔部周辺が摩耗して丸みを帯びるものがあり、4 では側面に稜が残る。なお、2・3 は被熱により器面にススが付着している。

白玉は、全て滑石を母材とし、大きさは直径 3.2～3.8mm、厚さ 1.3～2.0mm の範囲に収まる。ガラス玉は色調が淡青色透明（写真図版 4-8・10～12・14・17）と淡青色半透明（同-9・13・15・16）のものに分けられ、大きさは長軸 3.3～5.3mm、厚さ 1.5～3.7mm の範囲に収まる。端面の研磨は、淡青色透明のものは明瞭だが、淡青色半透明のものは不明瞭である。

植物遺存体は全てコメで 1,349 点出土した。全て脱穀された玄米の状態で炭化している。重量は 12.18g である。出土位置は建物南西部（図版 7 の d-3 地点）が 505 点と最も多く、隣（同 d-4 地点）が 308 点とこれに次ぐ。このほか建物東側（c-2 地点）でも 279 点と多く出土した。

#### 【表土・遺構確認面出土遺物】（図版 8・9、写真図版 4）

特徴がわかる土師器 6 点と管玉 1 点、ガラス玉 1 点、砥石 1 点を図示した。土師器は高坏・壺・甕があり、全て古墳時代前期（塩釜式期）に属するものである。図示した高坏 1 点（図版 8-20）は屈折脚である。壺は 4 点図示したが（図版 8-21～24）、口縁部がわかるものは 2 点のみで、複合口縁のもの（21）と二重口縁のもの（22）がある。21 は胴部外面にススが付着し、22 は一次口縁部が非常に短く、口縁部の内外面に赤彩が確認できる。残り 2 点（23・24）では、24 は頸部に突帯が付されており、23 は外面に赤彩がある。甕（図版 8-25）は 1 点図示した。口縁部外面にススが付着する。管玉（図版 8-18）は長さ 6.7mm、直径 4.4mm で、石材は鉄石英を用いている。片面穿孔で、一端は欠損して



SI13 竪穴建物跡グリッド凡例  
(上が北)

a-1	a-2	b-1	b-2
a-4	a-3	b-4	b-3
d-1	d-2	c-1	炭化米 279点 c-2
炭化米 308点 d-4	炭化米 505点 d-3	c-4	c-3

0 4m  
(S=1/120)

宮城県文化財調査報告書第245集「入の沢遺跡」  
第42図 SI13 竪穴建物跡(1) (54頁)

No.	種類	位置	層	長さ (mm)	直径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	石材	色調	特徴	写真 図版	登録 番号
1	玉類 管玉	c-3		16.50	5.90	—	2.0 ~ 2.8	(0.78)	滑石	オリーブ灰	両面穿孔 端面摩耗少ない	4-1	管玉 301
2	玉類 管玉	c-2・d-2		16.20	4.80	—	2.5 ~ 2.8	0.60	緑色凝灰岩	黒色	両面穿孔 端面摩耗 被熱	4-2	管玉 302
3	玉類 管玉	c-2・d-2		19.40	4.35	—	2.3 ~ 2.5	(0.57)	緑色凝灰岩	オリーブ灰	両面穿孔 孔内に穿孔具の回転痕あり 端面摩耗著しい 被熱	4-3ab	管玉 303
4	玉類 管玉		K2-4層	19.30	4.35	—	1.1 ~ 2.2	0.67	鉄石英	暗赤	片面穿孔 面取り 端面摩耗	4-4	管玉 304
5	玉類 白玉	c-2	周溝-1層	—	3.20	1.4 ~ 1.6	1.4 ~ 1.9	0.05	滑石	オリーブ黒	端面摩耗	4-5	白玉 201
6	玉類 白玉	c-2	周溝-1層	—	3.50	1.85 ~ 2.0	1.8 ~ 2.0	0.05	滑石	オリーブ灰	端面摩耗	4-6	白玉 202
7	玉類 白玉	a-3	D1	—	3.6 ~ 3.8	1.3 ~ 1.4	1.6 ~ 1.9	0.05	滑石	オリーブ灰		4-7	白玉 203

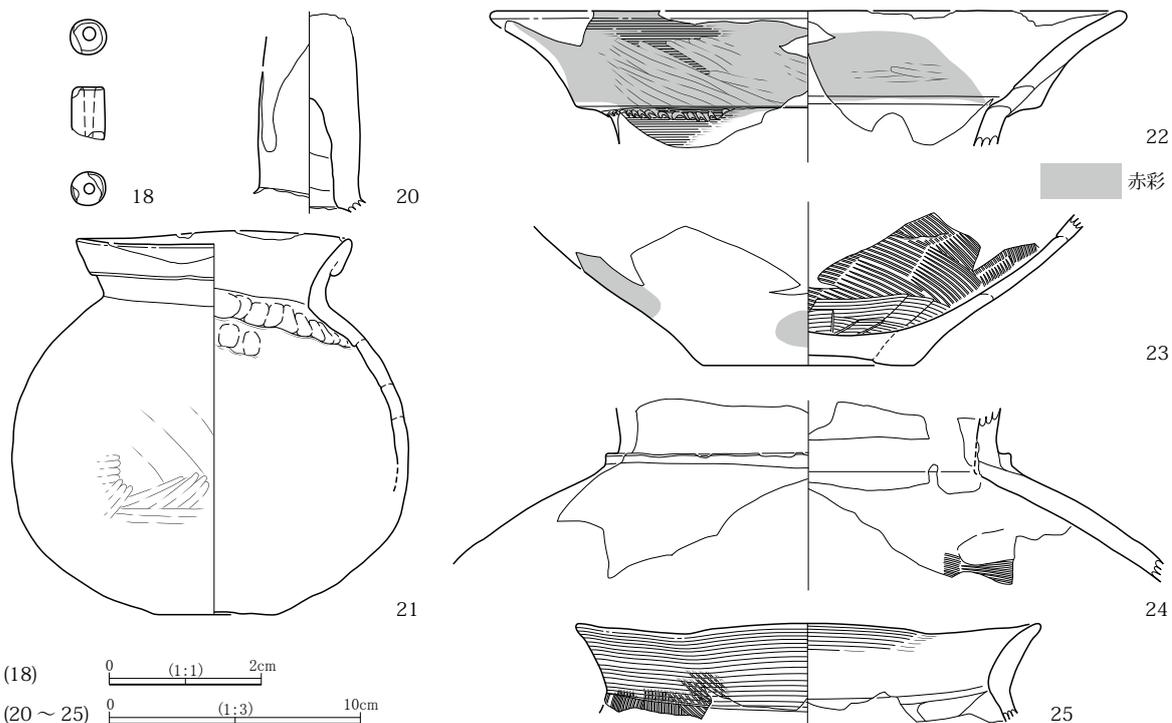
図版7 SI13 竪穴建物跡出土遺物

いるが破断面が摩耗していることから再利用されたと考えられる。ガラス玉(写真図版4-19)は長軸3.4mm, 厚さ2.3mmで, 色調は淡青色透明, 端面の研磨は明瞭である。砥石(図版9-26)は一部欠損しているが, 両面を砥面としていたとみられる。石材は花崗岩である。

## 5. C: 平成28年度遺跡保護

### (1) 遺跡保護にいたる経過

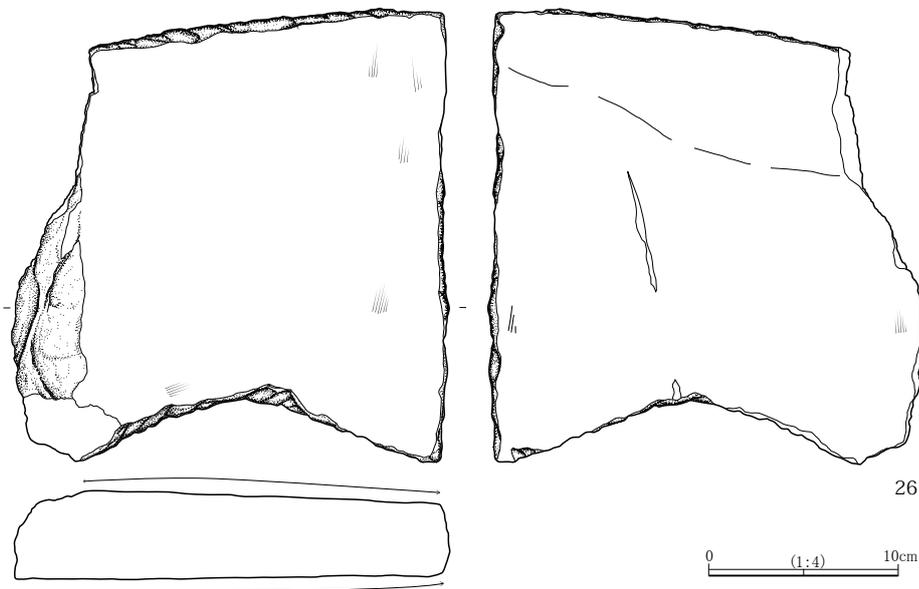
遺跡の保存と史跡指定を目指す方針が決定した後, 栗原市教育委員会との協議によって, 史跡指定までの管理を宮城県教育委員会が行い, 史跡指定後は栗原市教育委員会が行うこととなった。遺跡は平成26年度の本発掘調査実施後, ブルーシートによる養生で2度の冬を越えており, 保存状態の悪化が懸念されていた。そのため, 宮城県教育委員会は山砂による埋戻しを決定し, 平成28年度の追加調査実施後に施工することとした。



No.	器種	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	写真図版	登録番号
18	玉類 管玉	表土	-	-	-	長さ:6.7mm, 直径:4.4mm, 孔径:1.0~1.5mm, 重量:(0.25g) 石材:鉄石英 片面穿孔 破損したものをそのまま利用	4-18	管玉 401
20	土師器 高坏	SX65 確認面	-	-	(7.9)	屈折脚 外:ヘラミガキ, 内:ナデ。	4-20	R2002
21	土師器 壺	南側斜面	10.6	4.7	15.4	複合口縁 外:(口)不明(胴)ナデ?→ヘラミガキ, スス付着, (底)不明 内:(口)不明(胴)オサエ・ナデ コゲ付着	4-21	R2001
22	土師器 壺	SI55 確認面	(24.6)	(5.3)	-	二重口縁 外:ヨコナデ→ヘラミガキ, 内:ヘラミガキ? 内外赤彩	4-22	R2003
23	土師器 壺	SI55 確認面	-	8.4	(6.0)	外:(胴)不明, 赤彩(底)不明, 輪台状 内:ハケ→ヘラナデ	4-23	R2004
24	土師器 壺	SI58 確認面	-	-	-	外:調整不明, 頸部突帯 内:ハケ→ナデ	4-24	R2005
25	土師器 甕	SX65 確認面	(18.2)	-	(3.9)	外:ハケ→ヨコナデ, スス付着 内:ヨコナデ	4-25	R2006

※出土位置は図版 10 で示している。

図版 8 表土・遺構確認面出土遺物 (1)



No.	器種	出土位置	特徴	写真図版	登録番号
26	砥石	SI55 確認面	長さ:22.2cm 幅:23.2cm厚さ:4.1cm 石材:花崗岩 砥面 2面	4-26	R2007

図版 9 表土・遺構確認面出土遺物 (2)

(2) 作業の方法と経過 (図版 10, 写真図版 5)

作業は本発掘調査区を対象に平成 28 年 11 月 21 日より開始した。作業に先立って, 調査区を覆っていたブルーシート・土嚢を人力により除去し, その後に重機を用いて調査区全面を山砂で埋戻すと

もに、斜面部には人工張芝を貼付した。なお、重機による埋戻しは調査員の立会いのもと行った。作業手順については表2の通りである。

作業は11月30日にA区、続く12月12日にB区の埋戻しが完了し、12月19日までに両区の張芝作業が終了した。その後、平成29年1月15日から2月3日まで、草刈り・排水路補修等の環境整備を行い、遺跡保護に係わる一連の作業の完了後、2月1日にドローンによる航空写真撮影、2月16・17日に測量、2月28日に一切の作業を完了した。

【参考文献】

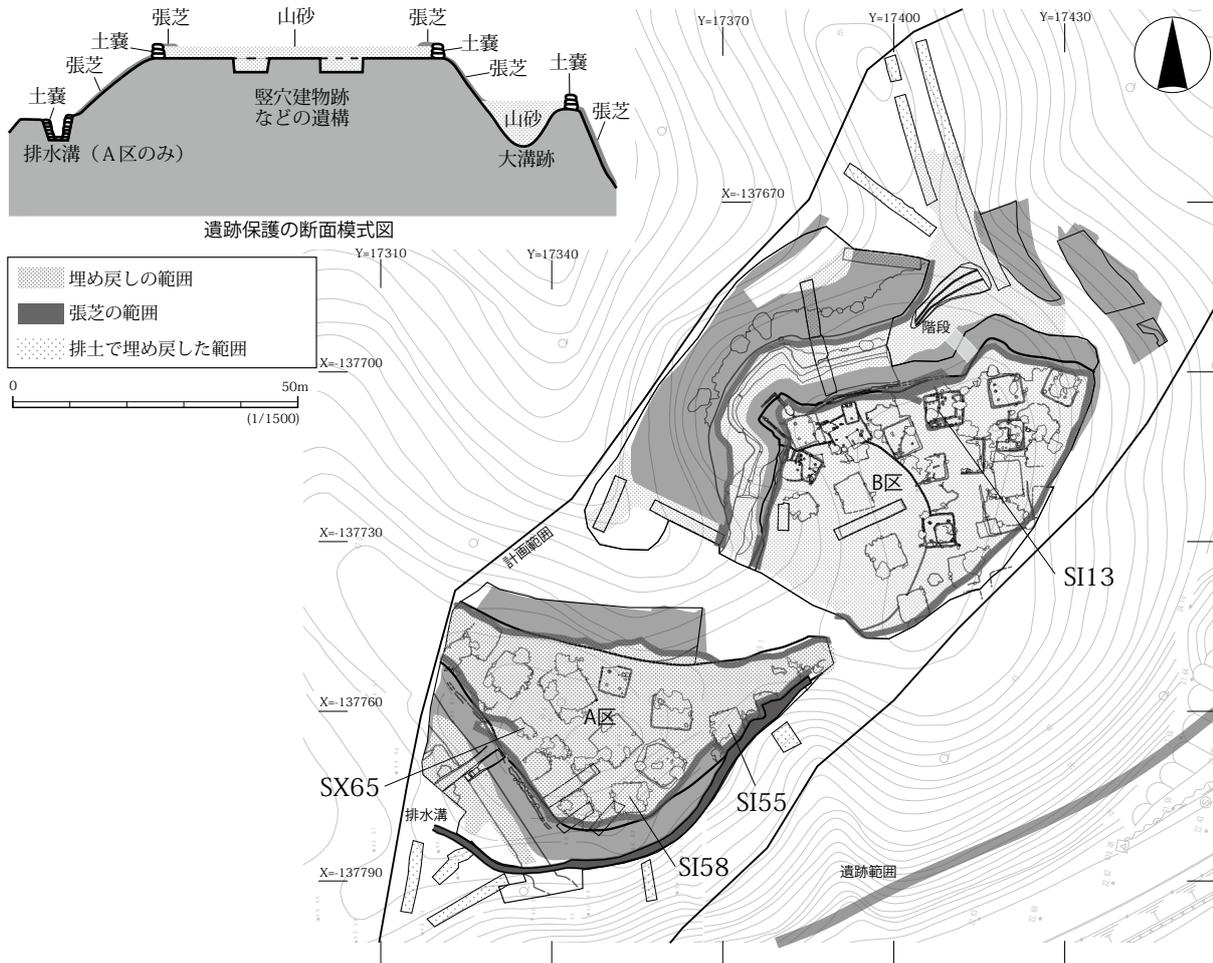
築館町教育委員会 2004 『伊治城跡 - 平成15年度：第29次発掘調査 - 』築館町文化財調査報告書第17集

築館町教育委員会 2005 『伊治城跡 - 平成16年度：第30次発掘調査 - 』築館町文化財調査報告書第19集

宮城県教育委員会 2016 『入の沢遺跡 - 一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅳ - 』宮城県文化財調査報告書第245集

行程	作業内容
1	調査区に敷設していたブルーシート・土嚢を除去する。土嚢は山砂の流出を防ぐために調査区平坦部と傾斜部の境に帯状に設置する。
2	ダンプカーにより山砂を丘陵中腹に設けた集積場まで運搬する。
3	バックホーにて山砂をクローラードンプに移し替え、丘陵頂部まで運搬する。
4	丘陵頂部にて待機しているバックホーの周辺に山砂を集積する。
5	山砂で作業道を作りながら、バックホーにてA区から埋め戻しを行う。掘り下げた遺構については地表面まで埋め戻し、さらに地表面から厚さ0.2m以上となるように平坦部を埋め戻す。
6	斜面部に張芝を貼付する。
7	調査区周辺の環境整備（草刈り、排水溝の補強作業等）を行う。
8	航空写真撮影ではマルチコプター（ドローン：DIJ社製 Phantom3 Professional）を用いた。
9	測量にはCUBIC社製電子平板システム「遺構くん」を用いた。

表2 埋め戻し作業と手順



図版10 遺跡保護の概要図



1 T17 トレンチ SF75 土壘跡・SD76 溝跡断面 (北東から)



2 SF75 土壘跡検出状況 (北から)



3 T17 トレンチ SD76 溝跡断面 (北から)



4 T17 トレンチ SF75 土壘跡断面 (北東から)



5 T17 トレンチ SF75 土壘跡断面 (北西から)

写真図版1 SF75 土壘跡・SD76 溝跡 (T17 トレンチ)



6 T18 トレンチ SF75 土塁跡・SD76 溝跡断面 (北から)



7 T18 トレンチ SF75 土塁跡・SD76 溝跡断面 (北東から)



8 T18 SF75A・B 土塁跡断面 (北西から)



9 T16 トレンチ SX77 積み土・SD78 溝跡・SD79 溝跡断面 (南東から)



10 T16 トレンチ SX77 積み土・SD79 溝跡断面 (南東から)



11 T16 トレンチ SD78 溝跡断面 (南から)



12 T10 トレンチ SF80 土塁跡・SD81 溝跡検出状況 (北西から)



13 T10 トレンチ SF80 土塁跡断面 (西から)

写真図版2 SF75 土塁跡・SD76 溝跡 (T18 トレンチ), SX77 積み土・SD78・SD79 溝跡 (T16 トレンチ), SF80 土塁跡・SD81 溝跡 (T10 トレンチ)



14 T3 SB82 掘立柱建物跡検出状況（北から）



15 SB82 北東隅柱（北から）



16 SB82 北側柱列西から一間目柱（北から）



17 SB82 北西隅柱（北から）



18 SB82 南東隅柱（北から）



19 SB82 南側柱列西から一間目柱（北から）



20 SB82 南西隅柱（北から）

写真図版3 SB82 掘立柱建物跡 (T3 トレンチ)



1～17:SI13, 18～26: 表土・遺構検出面  
 (1～19:S=1/1, 3b:S=任意, 20～25:S=1/3, 26:S=1/4)

写真図版4 SI13 竪穴建物跡・表土・遺構確認面出土遺物



21 A・B区全景（南西から）



22 A・B区埋め戻し前（南西から）



23 B区埋め戻し状況（西から）



24 A区張芝敷設状況（南西から）



25 A・B区遺跡保護完了状況（南西から）

写真図版5 遺跡保護の経過

## II. 市川橋遺跡

### 【調査要項】

遺跡名：市川橋遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 18008）

所在地：宮城県多賀城市市川字中谷地

調査原因：砂押川広域基幹河川改修事業による勿来川遊水地造成工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：遠藤則靖，伊藤智樹（千葉県派遣），須田正久（群馬県派遣）

調査期間：平成 28 年 1 月 12 日～2 月 19 日

調査面積：1,022㎡（対象面積：約 145,000㎡）

### 1. 遺跡の概要

#### （1）遺跡の位置と地理的環境

市川橋遺跡は宮城県の仙台市中央部から北東へ約 10km，多賀城市の北西部に所在する。特別史跡多賀城跡の南側から西側にかけて，東西 1.4km，南北 1.6km の範囲で，標高 2～3 m の水田地帯に広がる遺跡である（図版 11）。

地形的には仙台平野の北端部にあたり，砂押川左岸の丘陵地帯から沖積地へと移行する部分に位置する。丘陵地は陸前丘陵から派生した標高 50m 前後の緩やかな起伏をもつ多賀城台地で，その南西端に多賀城跡が所在する。多賀城跡外郭西辺のすぐ西側に勿来川，さらに約 200 m 西側に砂押川が南流し，外郭南西隅の約 100 m 南側で合流する。両河川の周囲には標高 2～3 m の沖積地が広がり，本遺跡はこの沖積低地上を主として東側の丘陵地と砂押川に挟まれて立地する。



図版 11 市川橋遺跡の位置と周辺の遺跡

#### （2）歴史的環境

市川橋遺跡は縄文時代から中世に至るまで断続的に営まれているが，特に奈良・平安時代においては陸奥国府多賀城跡と密接な関係を持つ。これまでの発掘調査成果から，西側に隣接する山王遺跡とともに多賀城城外に方格地割に基づいた街並みを形成していたことが明らかになり，多賀城跡周辺における集落や古代都市の様相を知るうえで重要な遺跡である。

今回の調査成果の中心となる弥生時代の遺構・遺物も，これまでに複数の地点で確認されている（図版 11- ①～⑤）。今回の調査対象地から砂押川を挟んで南側にある山王遺跡八幡地区（図版 11- 地点①）では，中期の榊形罎式土器や石器が出土している（宮城県教委 1994a）。また，その南西側の地点②では，土器は出土していないが，層序関係から榊形罎式期以前とみられる水田跡が検出されている（多賀城市教委 1997）。

市川橋遺跡では，砂押川西岸の伏石・八幡地区（地点③）で，県道「泉一塩釜線」関連事業に伴い平

成 18・19 年に調査が行われ、榊形冢式土器や土製品、石器、鹿角、鹿骨などがまとめて出土したほか、同時期と考えられる溝跡も見つかっている（宮城県教委 2009）。また、砂押川東岸の地点④でも、同事業に伴って平成 7 年から平成 10 年にかけて断続的に調査され、遺構は見つかっていないが、古墳時代および奈良・平安時代の河川堆積層から弥生前・中期の土器が出土している（宮城県教委 2001）。さらに約 800 m 南側の地点⑤では、城南土地区画整理事業に伴い多賀城市教育委員会による調査が行われ、地点④と同様、河川堆積層から榊形冢式土器を中心として、弥生時代前期から中期にかけての土器が出土している（多賀城市教委 2006）。これまでのところ建物跡は見つかっておらず、集落域は明確でないが、多賀城跡のなかにある五万崎遺跡から榊形冢式や十三塚式の土器や石包丁が出土しており、集落の存在が想定される（宮城県多賀城跡調査研究所 1977）。なお、榊形冢式土器の標式遺跡である榊形冢貝塚は、市川橋遺跡から南東約 6 km に位置する。

## 2. 調査に至る経緯と調査経過

勿来川遊水地造成工事は、平成 12 年度に砂押川広域基幹河川改修事業として計画された。対象地は周知の遺跡である市川橋遺跡内であり、また特別史跡多賀城跡の西側に隣接する区域であったため、事業者である宮城県仙台東土木事務所（当時）と宮城県教育庁文化財保護課（当時）が協議を行い、対象地内における遺構の分布や密度を確認するための確認調査を平成 12 年 8 月から実施した。調査の結果、古代の土器埋設遺構や溝跡などが確認されたことから、勿来川に架かる五万崎橋の西側約 1,100m<sup>2</sup>を対象として、平成 13・14 年度に本発掘調査を実施した。調査成果は宮城県文化財調査報告書第 193 集（宮城県教委 2003）として刊行している。

このとき計画された遊水地造成工事は、その後の調整等の関係や東日本大震災などの影響もあって中断されていたが、平成 27 年度に造成範囲を大きく拡大する形で再度計画された。そこで、宮城県仙台土木事務所と宮城県教育庁文化財保護課が協議を行い、平成 13・14 年度に調査済の範囲を除く部分について、遺構の有無を確認するための確認調査を実施することとなった。

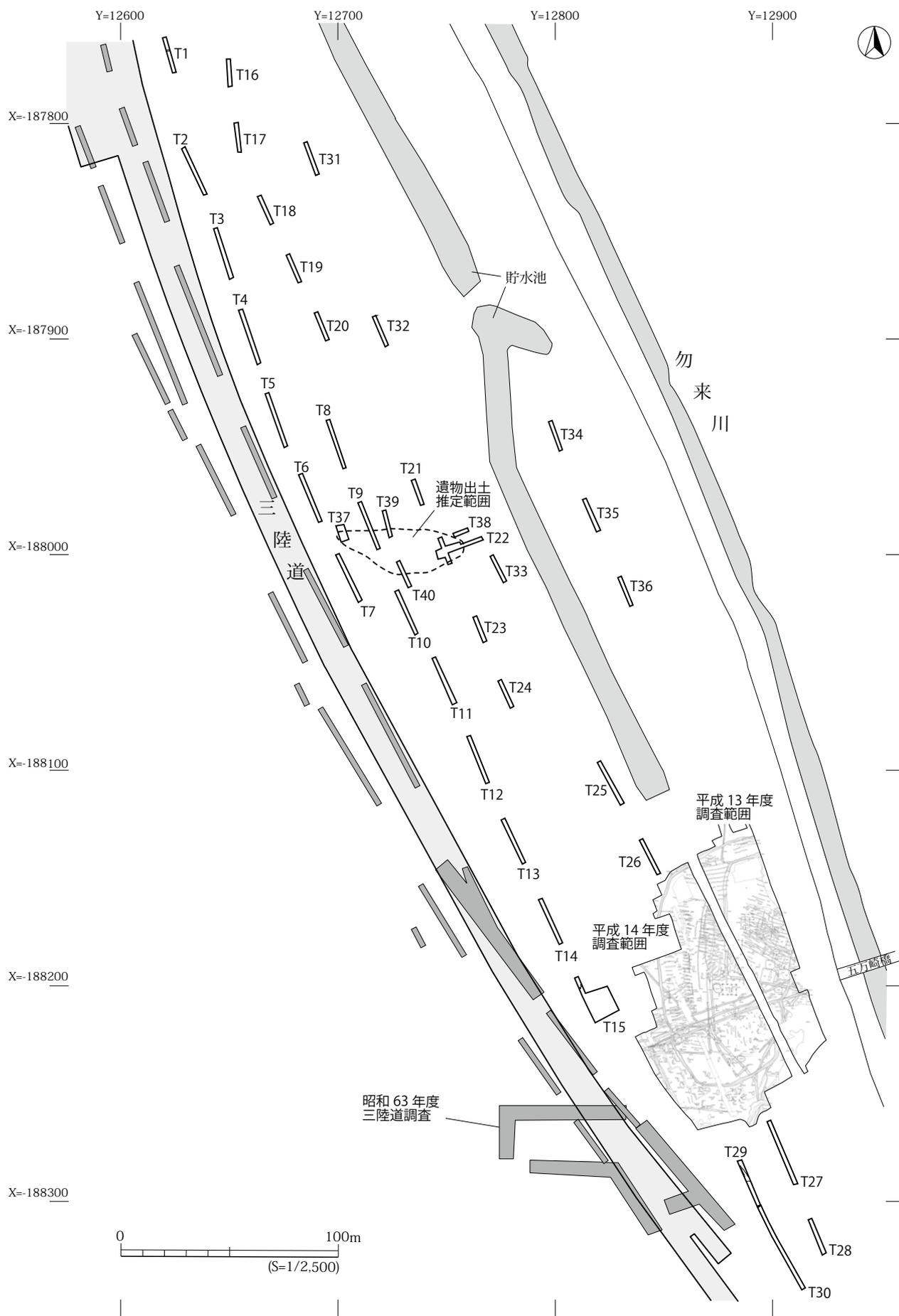
調査対象地は砂押川と勿来川に挟まれた約 145,000m<sup>2</sup>で、平成 12 年度以前は水田として利用されていた。また、三陸自動車道の高架下およびその西側も計画地に含まれているが、昭和 63 年度に三陸道および多賀城インターチェンジ建設計画に伴って発掘調査が実施されており、大部分が湿地で遺構・遺物が分布しないことが確認されている（宮城県教委 1997）。

確認調査は平成 28 年 1 月 12 日から県職員 3 名（うち派遣職員 2 名）と作業員 3 名で開始した。トレンチは南北方向を基本として T1 ～ 36 を設定し（図版 12）、バックホーを使用して 0.45m<sup>2</sup>のバケットの幅（約 1.6 m）で掘削後、作業員による遺構確認作業を進めた。対象地は低湿地帯であるため地下水位が高く、地表面から深さ 40 ～ 80cm 位で水が湧き出す状況であった。そのため、常にトレンチ内に 2 インチの水中ポンプ 2 台を稼働しながらの調査となった。確認深度が 2 m 以上になるトレンチについては、周辺を 1 m 程度下げ危険のないように配慮しながら調査を行った。遺構の検出されなかったトレンチは、写真撮影と測量を行ったうえで埋め戻した。

遺構・遺物が確認された T15 と T22 については拡張や延長を行い、特に弥生時代の遺物が多く出土した T22 については、周辺に追加で T37 ～ 40 を設定して、分布範囲及び出土状況などの調査を行った。調査結果を受けて仙台土木事務所と再協議した結果、遺構・遺物が確認された部分については、掘削深度を遺構面まで下げないで工事を実施するという計画となったため、本発掘調査は行わず、すべてのトレンチを記録作成後に埋め戻した。2 月 19 日に発掘道具等を撤収し、野外での調査業務を完了した。

検出した遺構には、過去の調査から継続する遺構番号 10370 ～ 10374 を付した。平面図はトータルステーションと遺構測量支援ソフト「遺構くん」を使用して作成した。断面図は基準杭からレベルで高さを求めて手実測で作成し、土層注記は『標準土色帖』1996 年版を使用した。また、写真はデジタルカメラ（1800 万画素）で撮影した。これらの図面・写真と遺物の整理作業は、平成 29 年 2 月～ 3

2. 市川橋遺跡

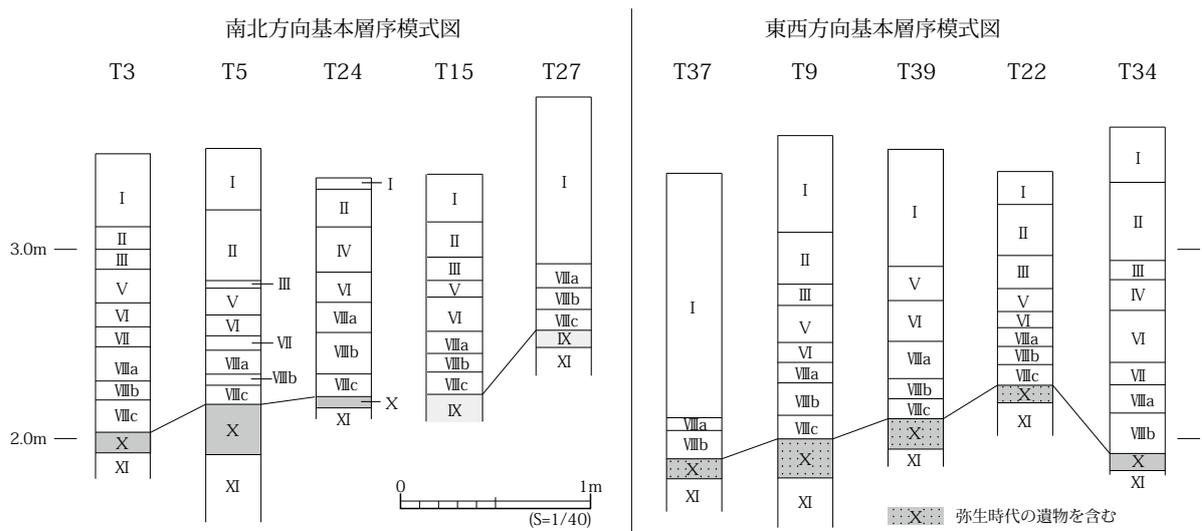


図版 12 平成 27 年度トレンチと平成 13・14 年度の調査区の位置

月に文化財保護課分室で実施し、3月25日に整理業務を完了した。

### 3. 基本層序

今回の調査範囲は低湿地であり、微高地上に形成された集落遺跡である平成13・14年度調査の土層とは異なる部分が多いため、別に基本層序を設定した。特に低地部分は調査地点により地形や堆積土層が異なっているが、これらを南北方向と東西方向に対応関係を整理してまとめたものが図版13である。Ⅷ層に灰白色火山灰が多く含まれ、Ⅸ層が古代の遺構確認面に対応する。Ⅹ層とした黒色土の一部に弥生時代の遺物が含まれる。なお、このほかに中央部T12～34にかけての南北50～80mの範囲には、近世から現代のものと考えられる北東から南西方向の小河川の流路や氾濫の痕跡が残り、砂層が堆積している。



- I層 盛土。厚さ20～50cmで調査区全域にみられる。
- II層 現代水田耕作土。
- III層 現代水田耕作土の床土。
- IV層 灰黄褐色(10YR5/2)酸化鉄の塊や粒を全体に含み、底部が歪むことから現代より前の水田耕作土とみられる。
- V層 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト。1～2cmほどの黒色粘質土と植物遺存体を多量に含む暗褐色粘質土が交互に堆積する層。調査区全域に見られる
- VI層 黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト。混入物はほとんど見られない。全域で確認はできないが、5～15cm程度堆積する場所もある。V層、VI層中より陶磁器片が出土しており、近世以降と考えられる。
- VII層 灰白色(10YR7/1)粘土質シルト。河川等の氾濫を起因すると考えられる層で、ほぼ全域で確認でき、締まり弱く、粘性強い。20～50cmの厚さで堆積が見られ、中位から下位層には灰白色火山灰小ブロックがまばらに堆積する。
- VIII層 粘土質シルトで、灰白色火山灰ブロックを全体的に含む。下層ほど黒味が強く、a層(褐灰色)、b層(黒褐色)、c層(黒色)に細分した。土師器や須恵器が出土しているため古代以降と考えられる。
- IX層 黄褐色(2.5YR5/3)砂質シルト。前回調査時の古代の遺構確認面。T15、T27～30に僅かに堆積が見られる。
- X層 黒色(7.5YR2/1)粘土質シルト。粘質性強く、締まり弱い。調査区ほぼ全域で見られ、厚さは10～15cmである。T22周辺で弥生土器が多く出土している。
- XI層 明青灰色(5B7/1)砂質シルト。低地部全域でX層下に堆積する。上面で弥生土器の出土が見られた。

図版13 調査区基本層序模式図

### 4. 発見された遺構と遺物

弥生時代の遺物包含層、古代以降の土坑2基と溝跡1条を確認した。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器が平箱1箱出土した。以下、時代ごとに記述する。

## (1) 弥生時代

調査対象地中央北側の T9・22・37・39・40 において、X層～XI層上面から弥生土器や石器が出土した。出土範囲は東西約 60 m、南北約 20 mに広がると推定される（図版 12）。

遺物総数は土器 812 点、石器 31 点で、そのうち土器 766 点と石器 30 点は T22 から出土している。特に遺物が集中する範囲が 2 か所確認され、それぞれ SU10370 と SU10371 として遺物を取り上げた（図版 14）。SU10370 は東西 2.0 m、南北 1.5 m の範囲で、土器片 37 点が出土した。SU10371 は東西 4.0 m、南北 3.5 m の範囲で、土器片 190 点、石器 9 点が出土した。土器は大部分が破片資料だが、これらの集中範囲から出土したものには、接合して器形が復元できるものもみられる。一方、T22 以外のトレンチでは、T9 で土器 2 点、T37 で石器 1 点、T39 で土器 17 点、T40 で土器 26 点が出土しているが、土器片は小片で摩滅したものが多く、

土器の器種は、鉢、高坏、蓋、壺、甕、袖珍土器、製塩土器がみられる。口縁部は 54 点出土しており、そのうち器種が推定可能なものとしては鉢 4 点、高坏 3 点、蓋 5 点、壺 0 点（頸部～体部破片のみ）、甕 7 点、袖珍土器 1 点、製塩土器 2 点である。これらの口縁部資料や、特徴的な文様をもつ体部～底部資料について、図版 14-1 から図版 15-33 に図示した。図版 15-19 が T40 出土、それ以外はすべて T22 出土である。

図版 14-1 ～ 7 は鉢で、全形のわかる資料はないが、口縁部（1a・3・5a・6）はいずれも外側に開く器形である。体部は緩やかに丸みを帯びながら立ち上がるもの（1・2）と、丸みが強く球胴形に近いもの（4・5）がある。文様モチーフは、平行沈線文と横方向の弧文（1・2）、1 条の沈線による連続山形文（3）、円文と同心円文（5）がある。6・7 は植物茎回転文と細い沈線文を施すもので、同一個体の可能性がある。

図版 14-8 ～ 11 は高坏で、8 ～ 10 は坏部、11 は脚部である。坏部は体部から口縁部まで緩やかに内湾しながら開く器形を呈し、口縁部に刻みもしくは突起を有する。8 は長方形と弧を組み合わせたモチーフとみられ、弧が上向きで、弧状のモチーフの内部を無文帯としている。9 は平行沈線文と弧文、10 は長方形を重ねた文様である。

図版 14-12 と図版 15-13 ～ 15 は蓋で、12 は器形全体が復元できる唯一の個体である。つまみ部は側縁をつまみ出して低い台状に作り出している。体部途中で外側に屈曲し、口縁部まで直線的に開く器形である。13 ～ 15 は口縁部破片で、体部から内湾気味もしくは直線的に開く器形とみられる。文様モチーフは平行沈線文（12・14・15）と連続山形文（13）がある。

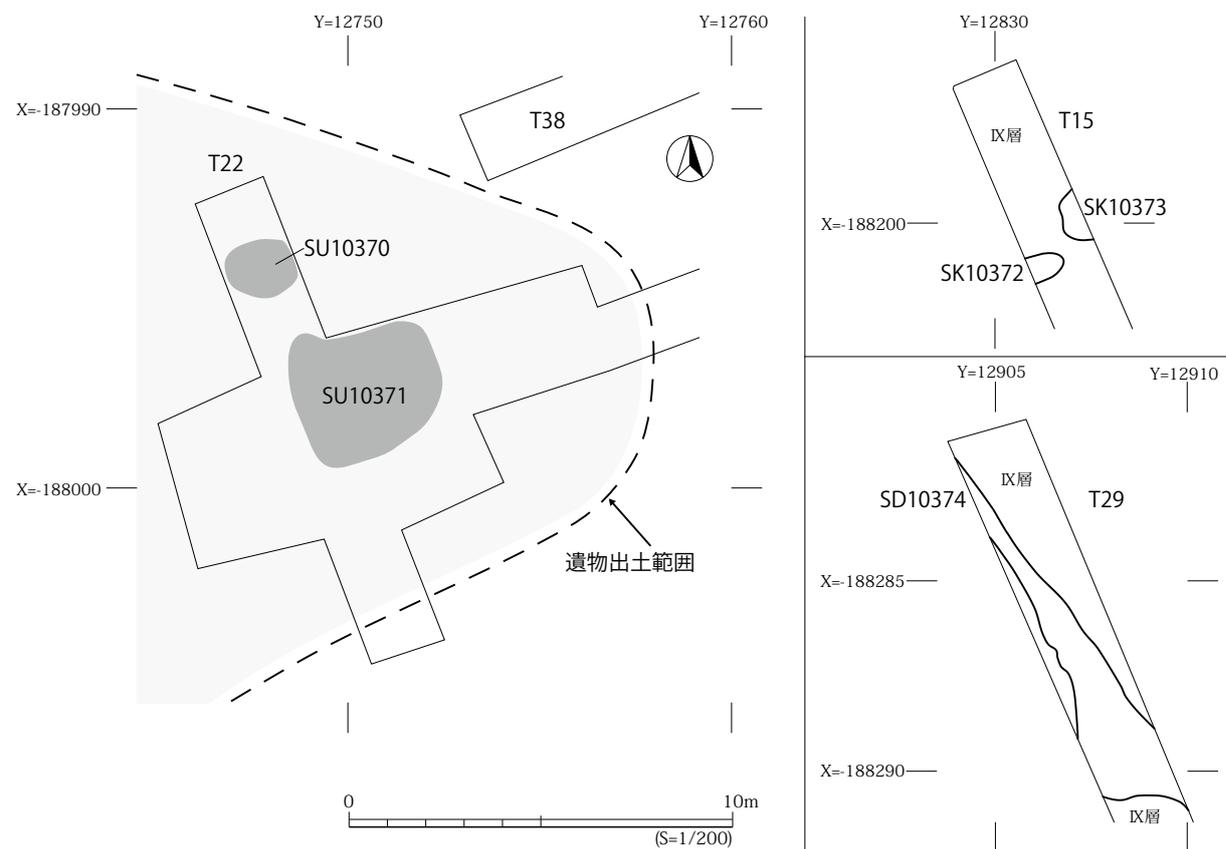
図版 15-17 ～ 19 は壺の頸部～体部破片で、体部には隆帯に列点文を施すもの（17）と、三角形と曲線（渦巻文か）を組み合わせた文様（18・19）がみられる。

図版 15-20 ～ 30 は甕で、口縁部は外反し、頸部が軽くくびれ、体部は緩やかに膨らむ器形である。頸部に 2 ～ 3 条の平行沈線文を施すもの（20 ～ 24）と、左から右方向に刺突した列点文（25 ～ 27）を施すものがある。体部には縄文のほか、縦方向の条線文（27）、植物茎回転文（29）が施される。底面には木葉痕、網代痕（28）、織布痕（30）がみられる。

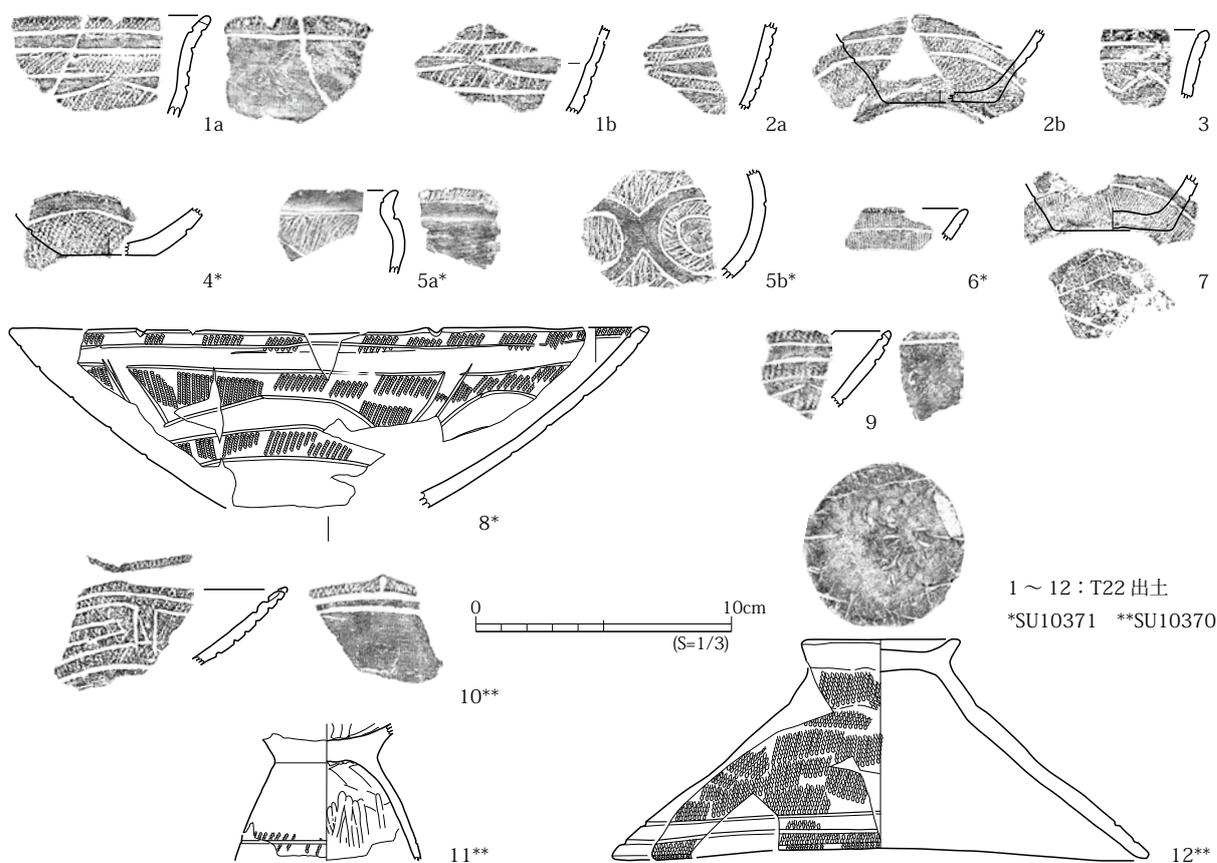
図版 15-31 は袖珍土器で、甕の器形に似るが、高さは 7 ～ 8cm と推定される。

図版 15-32・33 は製塩土器で、器壁は薄く、外面に粘土紐積上げ痕を残し、2 次被熱により赤褐色や暗赤褐色を呈する。SU10371 から 43 点出土しているが、大部分は細かな破片であり、個体数としてはわずかとみられる。

石器は石鏃 1 点、楔形石器 8 点、不定形石器 1 点が製品で、その他は石核や剥片である。石材別で見ると、碧玉 12 点、珪質頁岩 7 点、珪化凝灰岩 3 点、流紋岩 3 点、珪質凝灰岩 2 点、黒曜石 2 点、安山岩 1 点、黒色頁岩 1 点である。図版 15-34 の石鏃が T37 から、それ以外の石器はすべて T22 から出土しており、図版 15-35 ～ 38 に楔形石器 4 点を図示した。

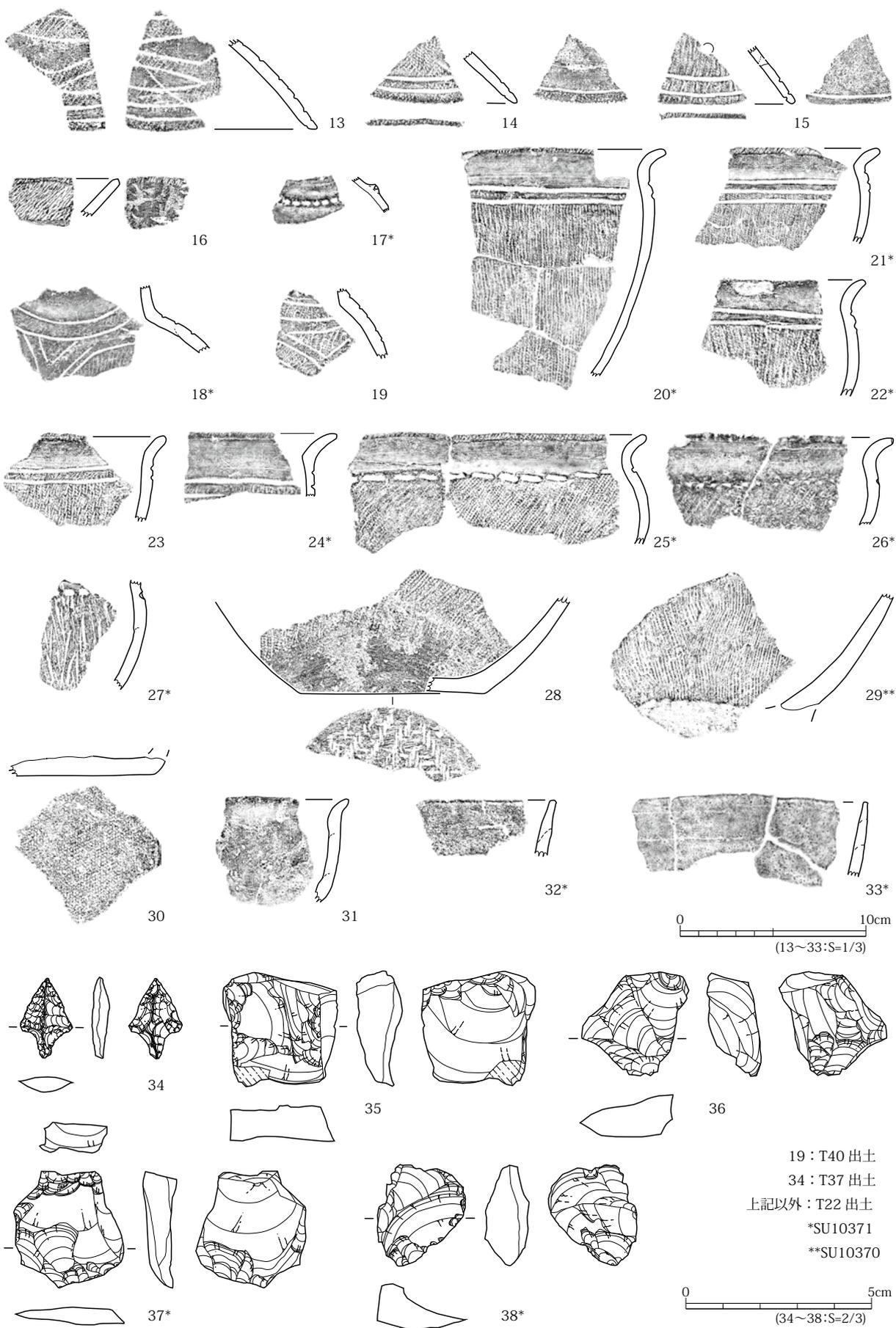


(1) 発見した遺構



(2) X層出土遺物 (1)

図版 14 発見した遺構とX層出土遺物 (1)



図版 15 X層出土遺物 (2)

図 No	層位	器種	残存	特徴	登録	
図版 14	1	T22- X層	鉢	口縁部・体部 (同一非接合)	口唇部：刻み目 外面：縄文 LR (4 条単位) →横位平行沈線文+弧文→磨消 内面：縄文 LR (4 条単位) →横位沈線文→ミガキ, 有段	R-7, 20
	2	T22- X層	鉢	体部・底部 (同一非接合)	外面：縄文 LR →横位平行沈線文+弧文 内面：ミガキ 底面：木葉痕	R-37
	3	T22- X層	鉢	口縁部	外面：口唇部・体部に縄文 LR →横位沈線文+連続山形文 内面：横位沈線文→ミガキ	R-34
	4	T22- X層 (SU10371)	鉢	底部	外面：横位沈線文→縄文 LR 内面：ミガキ 底面：ナデ	R-32
	5	T22- X層 (SU10371)	鉢	口縁部・体部 (同一非接合)	外面：体部に縄文 LR (4 条単位) →円文+同心円文→磨消 内面：縄文 LR (4 条単位) →横位沈線文→ミガキ	R-8
	6	T22- X層 (SU10371)	鉢	口縁部 (7 と同一か)	外面：植物茎回転文→横位沈線文 内面：ナデ	R-38
	7	T22- X層	鉢	底部	外面：植物茎回転文→横位沈線文 内面：ミガキ 底面：木葉痕	R-36
	8	T22- X層 (SU10371)	高坏	口縁～体部	口径約 22cm 口唇部：刻み目 外面：横位沈線文+方形区画文+弧文→縄文 LR (3 条単位) →磨消 内面：縄文 LR (摩滅) →横位沈線文→ミガキ	R-9
	9	T22- X層	高坏	口縁～体上部	口唇部：刻み目 外面：横位平行沈線文+弧文→縄文 LR →磨消 内面：横位沈線文→縄文 LR (摩滅) →ミガキ	R-13
	10	T22- X層 (SU10370)	高坏	口縁～体上部	小波状口縁 外面：縄文 LR →横位平行沈線文+長方形文 内面：縄文 LR →縦位短沈線文→横位平行沈線文→ミガキ	R-6
	11	T22- X層 (SU10370)	高坏	脚部	外面：縄文 LR (3 条単位) →横位沈線文→磨消 内面：ナデ→ミガキ	R-14
	12	T22- X層 (SU10370)	蓋	つまみ～口縁 部	口径約 20cm つまみ部径 6.2cm 器高 8.5cm 外面：横位平行沈線文→縄文 LR (4 条単位) →沈線間磨消→沈線一部引き直し 内面：ミガキ つまみ部：木葉痕→ナデ	R-1
図版 15	13	T22- X層	蓋	口縁～体部	外面：横位平行沈線文+連続山形文→縄文 LR (異条) 内面：横位沈線文→ミガキ	R-27, 28
	14	T22- X層	蓋	口縁部	外面：縄文 LR →横位平行沈線文 内面：縄文 LR →横位沈線文→ミガキ	R-18
	15	T22- X層	蓋	口縁部	外面：縄文 LR →横位平行沈線文 内面：横位沈線文 焼成後穿孔あり	R-22
	16	T22- X層	不明	口縁部	外面：縄文 LL 内面：口唇部に縄文 LL →ミガキ	R-35
	17	T22- X層 (SU10371)	壺	頸部	外面：隆帯上に列点文 内面：剥落	R-15
	18	T22- X層 (SU10371)	壺	頸～体上部	外面：体部に縄文 LR (異条) →横位平行沈線文+重三角形文+渦巻文? →磨消 内面：頸部のみミガキ	R-16
	19	T40- X層	壺	体部	外面：縄文 LR →横位沈線文+三角形文+渦巻文? 内面：ナデ	R-40
	20	T22- X層 (SU10371)	甕	口縁～体上部	外面：口唇・体部に縄文 LR (4 条単位) →頸部に横位平行沈線文→沈線間磨消 内面：ミガキ	R-2
	21	T22- X層 (SU10371)	甕	口縁～体上部	外面：口唇・体部に縄文 LLR →頸部に横位平行沈線文 3 条 内面：ミガキ	R-3
	22	T22- X層 (SU10371)	甕	口縁～体上部	外面：口唇・体部に縄文 LR (4 条単位) →頸部に横位平行沈線文 内面：ミガキ	R-5
	23	T22- X層	甕	口縁部	外面：頸部に横位平行沈線文→口唇・体部に縄文 LR + LL 合擦 内面：ミガキ	R-31
	24	T22- X層 (SU10371)	甕	口縁～頸部	外面：口唇・体部に縄文 LR →頸部に横位平行沈線文 内面：ミガキ	R-10
	25	T22- X層 (SU10371)	甕	口縁～体上部	外面：口唇・体部に縄文 LR (4 条単位) →頸部に列点文 (左→右) 炭化物付着 内面：ミガキ	R-4, 19
	26	T22- X層 (SU10371)	甕	口縁～体上部	外面：口唇・体部に縄文 LR (0 段多条) →頸部に列点文 (左→右) 内面：ミガキ	R-11, 12
	27	T22- X層 (SU10371)	甕	頸～体上部	外面：体部に縦位条線文→頸部に列点文 (左→右)	R-17
	28	T22- X層	甕	体～底部	外面：縄文 LR (4 条単位) →体下部ミガキ 内面：ナデ 底面：網代痕 (3 本越・3 本潜・1 本送)	R-33
	29	T22- X層 (SU10370)	甕	体下部	外面：植物茎回転文, 底部剥落 内面：ミガキ	R-39
	30	T22- X層	甕	底部	底面：織布痕	R-30
	31	T22- X層	袖珍 土器	口縁～体部	外面：ナデ 内面：ナデ (積上げ痕残す)	R-29
	32	T22- X層 (SU10371)	製塩 土器	口縁部	外面：粘土紐積上げ痕残す 内面：ミガキ 全体被熱	R-42
	33	T22- X層 (SU10371)	製塩 土器	口縁～体部	外面：粘土紐積上げ痕残す 内面：ミガキ 全体被熱	R-23

表 3 X層出土遺物(弥生土器) 観察表

図 No	地点/層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	残存	被熱	自然面	付着物	登録	
図版 15	34	T37- X層	石鏃	碧玉(赤)	21.2	13.8	4.1	0.8	完形	なし	なし	なし	S1
	35	T22- X層	楔形 石器	碧玉	29.5	23.3	11.8	7.3	完形	なし	なし	なし	S3
	36	T22- X層	楔形 石器	碧玉	30.7	30.6	10.8	9.1	完形	なし	なし	なし	S2
	37	T22- X層 (SU10371)	楔形 石器	碧玉	30.8	25.8	6.6	5.9	完形	なし	なし	なし	S4
	38	T22- X層 (SU10371)	楔形 石器	碧玉	27.6	21.5	10.9	4.8	完形	なし	なし	なし	S5

表 4 X層出土遺物(石器) 観察表

(2) 古代以降

平成 13・14 年調査の確認面に対応するとみられる黄褐色砂質シルト (IX層) 上面で、土坑 2 基、溝跡 1 条を検出した (図版 14)。出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明だが、古代以降と考えられる。

古代の遺物としては、T12・29・30・31・37 から土師器 2 点、須恵器 2 点、灰釉陶器 1 点、瓦片 1 点が出土している。いずれも小片であり、T30 のⅧ a 層から出土した灰釉陶器 1 点を写真で示した (写真図版 7-39)。長頸瓶の体部破片とみられる。

【SK10372 土坑】 (図版 14, 写真図版 6)

T15 北部の西壁際、IX層上面で検出した。楕円形の土坑と推定され、規模は東西が 0.6 m 以上、南北 0.5 m である。確認面の堆積土は、Ⅷ層に類似する黒色粘質シルトを主体とし、明青灰色砂質シルト小ブロックが混入する。

【SK10373 土坑】 (図版 14, 写真図版 6)

T15 北部の東壁際、IX層上面で検出した。楕円形の土坑と推定され、規模は東西 0.8 m 以上、南北 0.4 m である。堆積土は SK10372 と類似する。

【SD10374 溝跡】 (図版 14, 写真図版 6)

T29 のIX層上面で検出した。北西-南東方向の溝跡で、確認した範囲で長さ 10.2 m、上幅 0.4 m~1.7 m を測る。確認面の堆積土は明青灰色砂質土に褐灰色粘質シルト小ブロックが少量混入する。

5. まとめ

今回の調査で出土した弥生時代の遺物は、T22 周辺の比較的狭い範囲に集中しており、出土量は多くないものの、比較的短期間の様相を示す資料と考えられる。出土した弥生土器は、これまでに山王遺跡八幡地区 (図版 11 地点①) と市川橋遺跡伏石・八幡地区 (地点③) の調査で出土した土器と、器種・器形・文様等の類似点が多く、弥生時代中期中葉の柵形罫式に位置づけられる (宮城県教委 1994a・2009)。柵形罫式がまとまって出土している代表的な遺跡としては、仙台市高田 B 遺跡 (宮城県教委 1994b, 仙台市教委 2000) と中在家南遺跡 (仙台市教委 1996) がある。伏石・八幡地区の報告では、これらの遺跡と比較して、錨形文や変形工字文がないこと、甕の頸部に綾線文が比較的多く用いられていることなどから、柵形罫式土器のなかでも新しい様相を示すものとされている (宮城県教委 2009)。

今回出土した土器に着目すると、錨形文や変形工字文がみられないという点は伏石・八幡地区と共通しており、その他の文様モチーフについても共通性が高い。一方、甕の頸部の区画については、未報告の破片も含めると平行沈線文 10 点、列点文 5 点で、綾線文は認められない。平行沈線文の多用は、伏石・八幡地区、高田 B 遺跡、中在家南遺跡のいずれとも異なっているが、山王遺跡八幡地区 (地点①) 出土土器には同様の特徴が認められる。

地文については、縄文と植物茎回転文がみられる。縄文は、最後に L 撚りするものが大部分で、柵形罫式の特徴である直前段多条、反撚り、付加条などが多くみられる。今回は詳細な分類は行っていないが、観察表で「4 条単位」としたものは、同一の条が 3 本おきに見えるもので、直前段多条 (4 本撚り)、もしくは反撚りによる撚り戻し (LLR など) と考えられる。「3 条単位」としたものは、同一の条が 2 本おきに見えるもので、直前段多条 (3 本撚り) もしくは付加条と考えられる。

植物茎回転文は、伏石・八幡地区や中在家南遺跡では地文全体の 10~20% を占めるのに対し、今回は未報告の破片も含めて 11 点であり、5% に満たない。今回の出土土器は比較的短期間の一括資料とみられることから、柵形罫式のなかでの微妙な時期差を示す可能性がある。

製塩土器は、縄文時代から古代にかけて松島湾沿岸の遺跡から多く出土しており、古代には多賀城

跡からも出土例が見られる。しかし、弥生時代に伴う事例としては、多賀城市榊形囲貝塚（多賀城市 1997 - P.163）のほか、七ヶ浜町東宮貝塚や松島町西の浜貝塚など少数にとどまる（東北歴史資料館 1989）。今回は海岸からやや離れた遺跡において、榊形囲式に確実に伴う形で出土したという点で、貴重な事例といえる。

#### 【参考文献】

- 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他』 仙台市文化財調査報告書第 213 集
- 仙台市教育委員会 2000 『高田 B 遺跡』 仙台市文化財調査報告書第 242 集
- 多賀城市 1997 『多賀城市史 1 原始・古代・中世』
- 多賀城市教育委員会 1997 『山王遺跡 I』 多賀城市文化財調査報告書第 45 集
- 多賀城市教育委員会 2006 『市川橋遺跡』 多賀城市文化財調査報告書第 85 集
- 東北歴史資料館 1989 「仙台湾周辺の製塩遺跡」 『東北歴史資料館研究紀要』 第 15 巻
- 宮城県教育委員会 1994a 『山王遺跡八幡地区の調査』 宮城県文化財調査報告書第 162 集
- 宮城県教育委員会 1994b 『高田 B 遺跡—第 2 次・3 次調査—』 宮城県文化財調査報告書第 164 集
- 宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡 V』 宮城県文化財調査報告書第 174 集
- 宮城県教育委員会 2001 『市川橋遺跡の調査』 宮城県文化財調査報告書第 184 集
- 宮城県教育委員会 2003 『市川橋遺跡』 宮城県文化財調査報告書第 193 集
- 宮城県教育委員会 2009 『市川橋遺跡の調査』 宮城県文化財調査報告書第 218 集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1977 『多賀城跡—昭和 52 年度発掘調査概報—』 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977

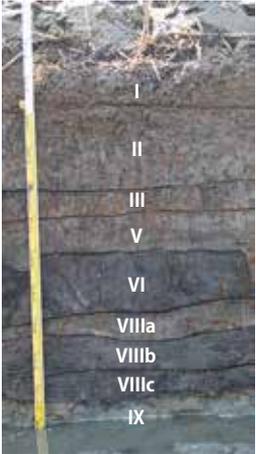
2. 市川橋遺跡



1 調査地点遠景（北東から）



2 調査地点遠景（南東から）



3 T15 西壁



4 T22 南壁



5 T22 全景（北東から）



6 T22 弥生土器出土状況



7 T22 作業風景

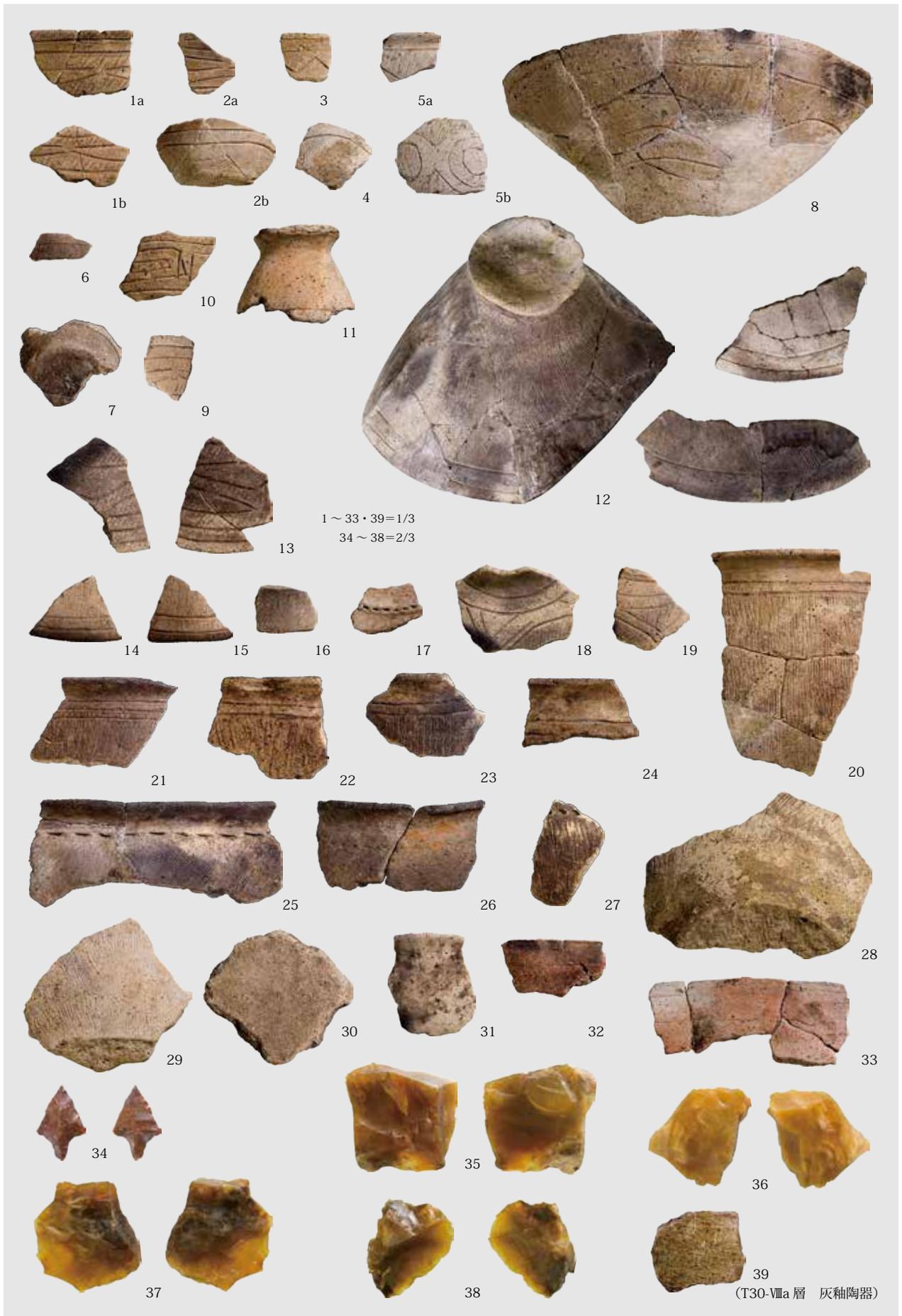


8 T15 土坑検出状況（東から）



9 T29 溝跡検出状況（南から）

写真図版6 市川橋遺跡調査写真



写真図版7 市川橋遺跡出土遺物写真

### III. 坂ノ下浦 I 遺跡

#### 【調査要項】

遺跡名：坂ノ下浦 I 遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 46034）

所在地：宮城県栗原市瀬峰字坂ノ下浦

調査原因：瀬峰太陽光発電所建設

調査主体：宮城県教育委員会，栗原市教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課（初鹿野博之，猪股清和，梅川隆寛）

栗原市教育委員会文化財保護課（大場亜弥，堀哲郎，安達訓仁）

調査期間：平成 29 年 8 月 21 日～10 月 27 日，平成 31 年 2 月 18 日～3 月 18 日

調査面積：2,743m<sup>2</sup>（調査対象面積：約 26,400m<sup>2</sup>）

#### 1. 遺跡の概要と調査に至る経緯

坂ノ下浦 I 遺跡は，宮城県北部の栗原市瀬峰にある縄文時代・古代の集落跡である。遺跡は JR 瀬峰駅の北西側約 1.7km に位置し，西から東に向かって延びる丘陵の尾根とその南北両側の斜面に立地する。遺跡範囲は東西約 300m，南北約 170m，標高は 25～59m である。

宮城県埋蔵文化財包蔵地調査カードによると，昭和 50 年代に丘陵の東端および南側斜面で苗圃の造成が行われ，その際に竪穴建物跡とみられる落ち込みや縄文土器・土師器・須恵器・石器等の遺物が確認されたという。採集された鉄斧 1 点が報告されている（瀬峰町教委 1985）。その後，遺跡の大部分は山林となっていたが，平成 28 年度になって，かつて造成された南側斜面を中心に太陽光発電所建設が計画されたため，確認調査を実施することとなった。

本遺跡周辺には丘陵を中心に多数の遺跡が分布しており，特に古代（奈良・平安時代）の集落跡が多い。南東側の丘陵に位置する大境山遺跡では，古代の竪穴建物跡 23 棟が調査されており（瀬峰町教委 1983），西側に隣接する岩石 I 遺跡でも複数棟の竪穴建物跡が調査されている（瀬峰町教委 1977・1980・1985）。そのほか，長者原 II 遺跡・清水山 I 遺跡・桃生田前遺跡・下富前遺跡・民生病院裏遺跡・下藤沢 II 遺跡などで発掘調査が行われ，古代の遺構・遺物が検出されている。



図版 16 坂ノ下浦 I 遺跡の位置と周辺の遺跡

（国土地理院発行 1/25,000 地形図「高清水」を使用）

## 2. 調査の方法と経過

調査対象地は丘陵の東端～南側にかけての斜面で、標高は25～52mである。丘陵東端部は過去の開発の際に最大で約8m削られて平坦面が造成されていた。南斜面も、北側と西側は用地に沿って2～4m程度削られて段差となっており、そこから沢に向けてなだらかな斜面が造成され、中腹に東西方向の作業道が敷設されていた。また、沢の中央部は、ため池として利用されていた。

工事は、対象地のほぼ全体に深さ約1.6mの杭打ちによって太陽光パネル架台を設置するほか、用地南端部に調整池を掘削する計画となっていた。

平成29年度には、対象地のうち伐採の完了した範囲にトレンチ27本（T1～27, 441㎡）を設定し、重機で表土・盛土を除去し、人力で遺構検出を行った。その結果、南斜面から古代とみられる竪穴建物跡4棟（SI1～4）、溝跡3条（SD5～8）、土坑2基（SK9・10）が検出されたため、一部の遺構は断ち割り等を行って断面図を作成した。この段階では遺構の広がりや把握しきれなかったため、対象地全体の伐採が完了した平成30年度に再度確認調査を実施した。前回の調査地点以外の範囲にトレンチ44本（T28～71, 2302㎡）を入れて、同様に遺構検出を行った。その結果、竪穴建物跡5棟（SI11～15）、溝跡4条（SD16～19）、土坑2基（SK20・21）、炭堆積層1か所（SX22）を検出した。

調査の記録について、トレンチと遺構の平面図は電子平板で作成し、断面図は図面用紙に20分の1で手書きした。写真は一眼レフデジタルカメラで撮影した。遺物は2回の調査を合わせて、土師器・須恵器・縄文土器・石器が平箱1箱出土した。

検出した遺構は、すべて南斜面の中腹付近に分布する。斜面上方の対象地北縁～西縁部、斜面下方のため池周辺、および丘陵の東端部は、過去の造成で大きく切土されていることが確認され、一部旧地形が残る盛土下を含めて遺構・遺物は検出されなかった。また、対象地南西部（T30～38周辺）では、II層から遺物が数点出土したが、遺構の分布は確認されなかった。以上の結果を受けて事業者と再協議を行い、遺構の分布する範囲（図版17の赤線）については、調整池の計画範囲から除外し、架台の基礎が遺構面に達しないように盛土等で保護することとなったため、本発掘調査は行わずに調査終了とした。

## 3. 発見された遺構と遺物

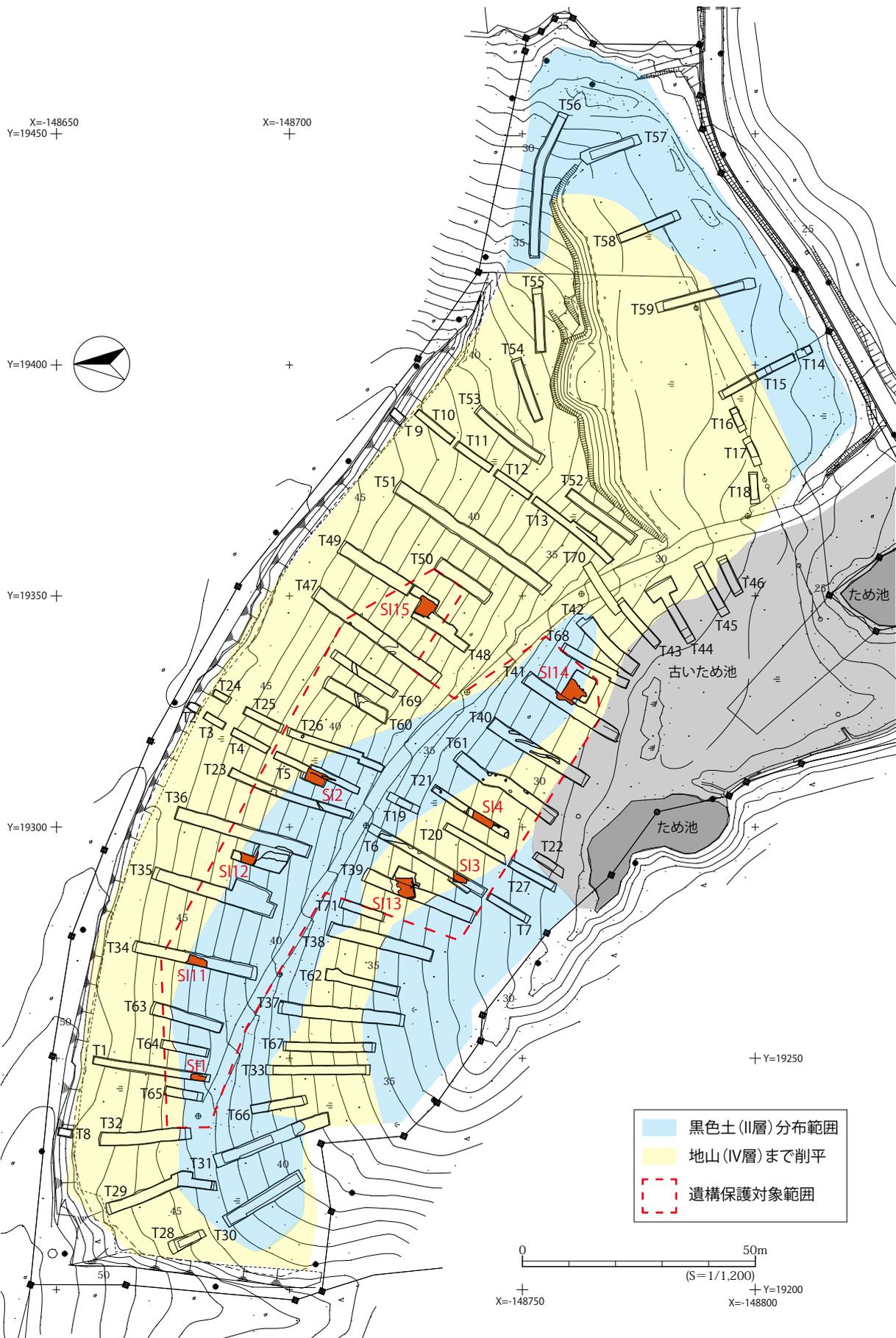
調査対象地は昭和50年代の造成の際に大規模な切土・盛土がなされている。浅いところでは現表土（Ia層）の直下、深さ20cm未満で遺構面に達するが、深いところでは褐色の盛土（Ib層）が厚さ約1mに及ぶ。この盛土の下層を中心に、かつて窪地だった部分には黒色土（II層）の堆積が認められ、古代の遺構を覆うように堆積している。また、古代の竪穴建物跡の内部には、II層直下に灰白色火山灰の堆積層（III層）が認められることが多い。古代の遺構確認面（IV層）は、褐色のシルト、黄褐色の砂・粘土など、地点や深さによって異なり、一部の断面図では細分しているが、詳細は本報告では割愛する。

検出した遺構は、竪穴建物跡9棟、溝跡8条、土坑4基、炭堆積層1か所で、いずれも平面確認と一部断ち割り調査にとどめている。各遺構の特徴等については表5～7の一覧にまとめた。

竪穴建物跡は形態や出土遺物などから、いずれも古代のものと推定される。斜面に立地しているため、平面形が明確な隅丸方形として検出されないものが多い。SI2の北辺とSI13の南辺でカマドが検出されたほか、SI2とSI14では斜面下方に外延溝とみられる溝状の張り出しが検出された。遺物はいずれも確認面のものだが、SI2～4出土の赤焼土器環（図版19-1）と須恵器環（図版18-1, 20-1）を図示した。

溝跡と土坑は年代・性格不明なものが多いが、SD7は位置的にSI4の外周溝にあたる可能性があり、堆積土中から土師器甕（図版20-2・3）が出土している。また、SK21の確認面で土師器環（図版22-1）などの遺物が出土している。このほかに、SI12の斜面下方に大量の炭化材を含む層が検出された（SX22）。SI12の建物が焼失したことに由来する堆積の可能性を考えたが、SI12の検出面には炭や

3. 坂ノ下浦 I 遺跡



図版 17 調査区の位置と遺構の分布

番号	区	平面形	規模	特徴等	灰白色火山灰	遺物	図版
SI1	T1	隅丸方形か	南北 3.3m ~ 東西 1.4m ~	堆積土は 1 層が灰黄褐色シルト, 2 層がにぶい黄褐色シルト。	—	土師器甕 (ロクロ)	18
SI2	T5	隅丸方形か	南北 4.6m 東西 2.5m ~	北辺にカマド。南東隅より斜面下方へ外延溝。	○	土師器鉢・甕, 須恵器坏	18
SI3	T6	隅丸方形か	南北 3.0m 東西 2.2m ~ 深さ 0.3m	一部精査。地山及び風倒木痕を床とし, 南半は水流の影響で破壊されている。周溝を一部確認。	○	土師器坏・甕 (ロクロ), 須恵器坏, 赤焼土器坏	19
SI4	T21	隅丸方形か	南北 6.2m 東西 2.2 m ~ 深さ 0.5m	一部精査。重複あり, SI4 → III 層灰白色火山灰 → SK10 → SD8 → II 層黒色土。床面はやや南側へ傾斜し, 北側は地山, 南側は掘方埋土を床とする。周溝あり。	○	土師器坏 (ロクロ)・鉢 (ロクロ)・甕, 須恵器坏	20
SI11	T34	隅丸方形	南北 4.7m 東西 1.9m ~	斜面上方に大きく段が付く。高さ 1.4m。黒色シルト (II 層対応) に覆われる。	○	土師器坏 (ロクロ)・甕	21
SI12	T36	隅丸方形	南北 3.7m 東西 1.8m ~	堆積土は黒色シルト (II 層対応), 下層に暗褐色シルト (炭・地山塊少し含む)。	○	土師器甕	21
SI13	T39	隅丸方形	南北 3.6m ~ 東西 4.5m	北辺は風倒木痕により攪乱, 南西部は床面まで削平。堆積土はにぶい黄褐色シルト (炭・地山粒多く含む)。南辺にカマド, 煙道は壁に対して斜めに取り付き, 斜面下方へ幅 0.3m × 長さ 1.1m。周溝を一部確認。	—	須恵器坏	19
SI14	T41	隅丸方形か	南北 4.7m 東西 5.4m	堆積土は黒色シルト (II 層対応), 下層に暗褐色粘土質シルト (炭・焼土・火山灰を含む)。南東隅の外延溝とみられる張り出しに, 炭・焼土多く含む。	ブロック状	土師器甕, 須恵器坏	22
SI15	T48	隅丸方形	南北 4.1m 東西 3.9m	堆積土は暗褐色シルト (炭・焼土を含む)。南西隅が溝状に張り出す。	○		23

表 5 竪穴建物跡一覧表

番号	区	方向平面形	規模	特徴等	灰白色火山灰	遺物	図版
SD5	T23	東西方向 弧状	幅 0.7m 長さ 2.0m	底面皿状で, 壁は緩やかに立ち上がる。深さ 0.5m。	—	なし	18
SD6	T6	南北方向 直線状	幅 1.1m 長さ 5.7m ~	底面皿状で, 壁は緩やかに立ち上がる。深さ 0.2m。	—	なし	19
SD7	T21	東西方向 弧状	幅 0.4m 長さ 1.6m ~	SI4 の外周溝か。 底面平坦で, 壁は急に立ち上がる。深さ 0.3m。	—	なし	20
SD8	T21	東西方向 直線状	幅 0.6m 長さ 1.7m ~	重複あり, SI4 → III 層灰白色火山灰 → SK10 → SD8 → II 層黒色土。 底面平坦で, 壁は急に立ち上がる。深さ 0.2m。	—	なし	20
SD16	T40	南北方向 直線状	幅 0.6m 長さ 2.5 m	黒褐色シルト堆積。斜面下方への自然流路か。	ブロック状	土師器坏 (ロクロ)・甕, 須恵器坏・甕	22
SD17	T40	南北方向 直線状	幅 0.7m 長さ 6.0m				
SD18	T40	南北方向 直線状	幅 0.6m 長さ 6.7 m				
SD19	T47, 60.69	東西方向 直線状	幅 1.0m 長さ 18.4m	底面皿状で, 壁は中途に段が付きながら緩やかに立ち上がる。深さ 0.2m。	—	なし	23

表 6 溝跡一覧表

番号	区	平面形	規模	特徴等	灰白色火山灰	遺物	図版
SK9	T21	円形か	南北 0.7m 東西 0.3m ~	自然堆積。	—	なし	20
SK10	T21	楕円形か	直径 0.3m ~ 深さ 0.2 m	重複あり, SI4 → III 層灰白色火山灰 → SK10 → SD8 → II 層黒色土。 底面皿状, 壁やや急。自然堆積。	再堆積	なし	20
SK20	T61	円形	南北 0.9m 東西 0.6m ~	堆積土は暗褐色シルト (炭・地山塊少し含む)	—	なし	22
SK21	T61	円形	南北 1.0m 東西 0.4m ~	堆積土は暗褐色シルト (炭多く, 地山塊少し含む)	—	土師器坏 (ロクロ), 土師器甕, 須恵器坏・甕	22
SX22	T36	—	南北約 6m 東西約 5.7m	炭を大量に含む層の広がり。SI12 の焼失由来, もしくは別の焼失建物等の可能性あり。	—	被熱した土師器片	21

表 7 土坑・その他の遺構一覧表

3. 坂ノ下浦I遺跡

焼土がほとんど混じっていない。掘り下げを行っていないため詳細は不明だが、炭化材が特に密集するSX22の2層分布範囲に焼失建物もしくは焼成遺構等があった可能性も考えられる。

なお、T68のII層から縄文中期とみられる土器片、T31のII層から石鏃が出土している（写真図版9-12・13）。いずれも古代以降に二次的に流入したものと考えられ、縄文時代の遺構と認定できるものは検出されていない。

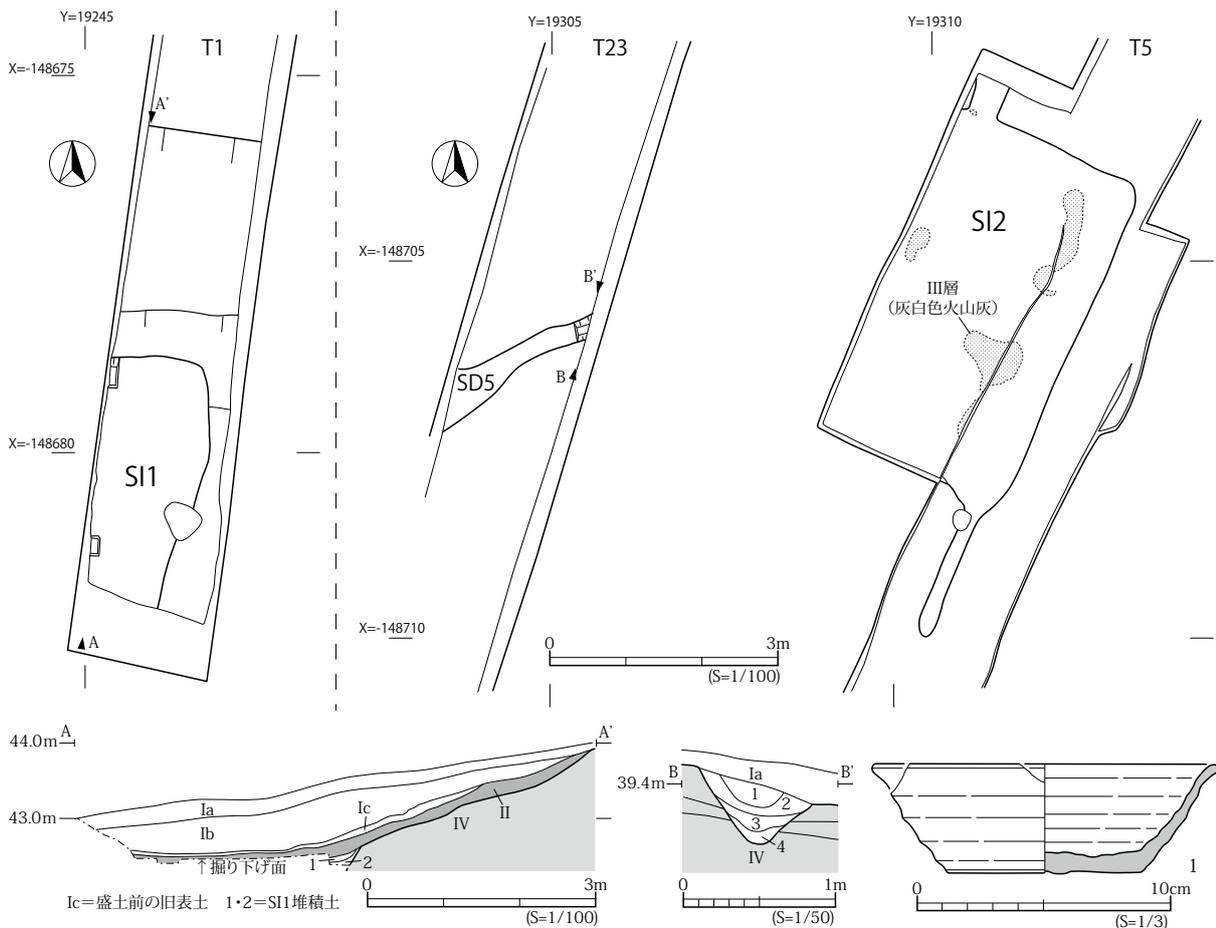
4. まとめ

今回の調査は部分的な確認にとどまるが、竪穴建物跡9棟などの遺構が検出された。遺物はロクロ調整の土師器が多く出土しており、隣接する大境山遺跡や岩石I遺跡で9世紀から10世紀に位置付けられている土器群と類似する。また、7棟の竪穴建物跡で灰白色火山灰の堆積が認められたことから、多くの建物は10世紀初頭には廃絶していたとみられる。以上より、集落の年代は、おおよそ9世紀から10世紀初頭が中心と考えられる。

【参考文献】

瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集

瀬峰町教育委員会 1977・1980・1985『がんげつ遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第1・3・5集



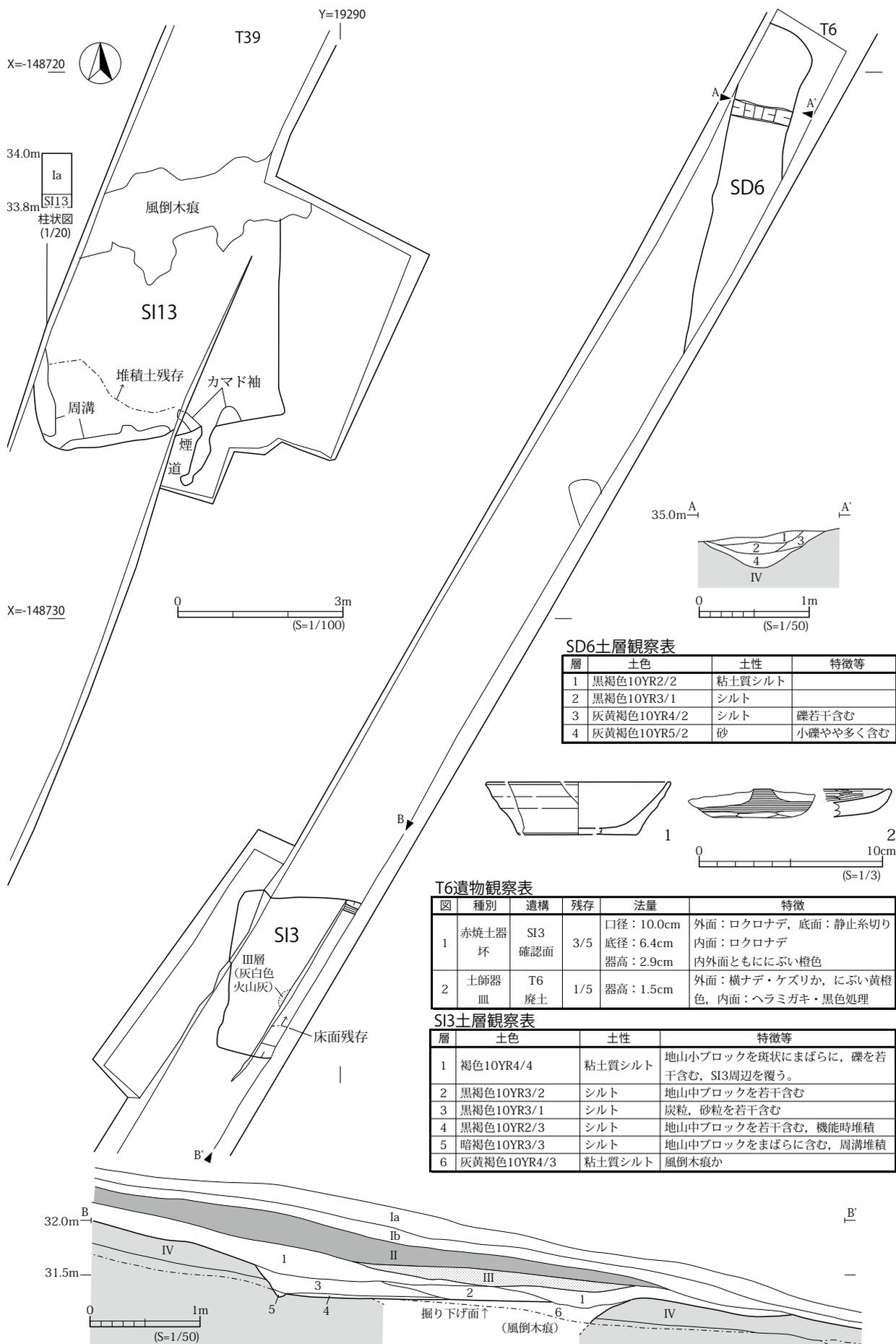
SD5土層観察表

層	土色	土性	特徴等
1	にぶい黄褐色10YR5/3	砂質シルト	
2	灰黄褐色10YR6/2	砂質シルト	
3	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	炭粒を若干含む。
4	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	地山小、中ブロックをまばらに含む。

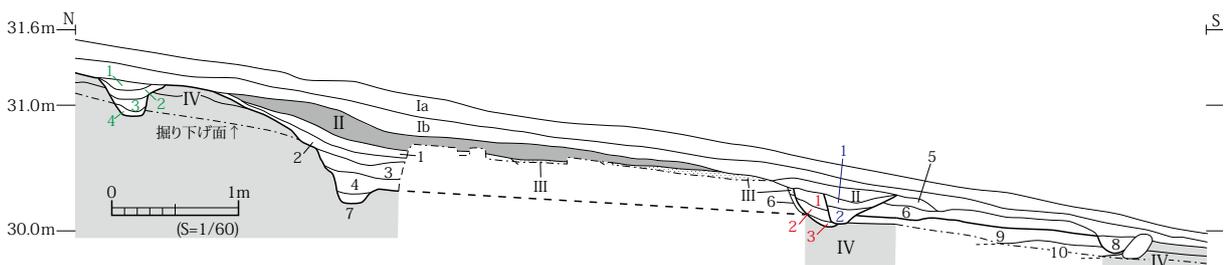
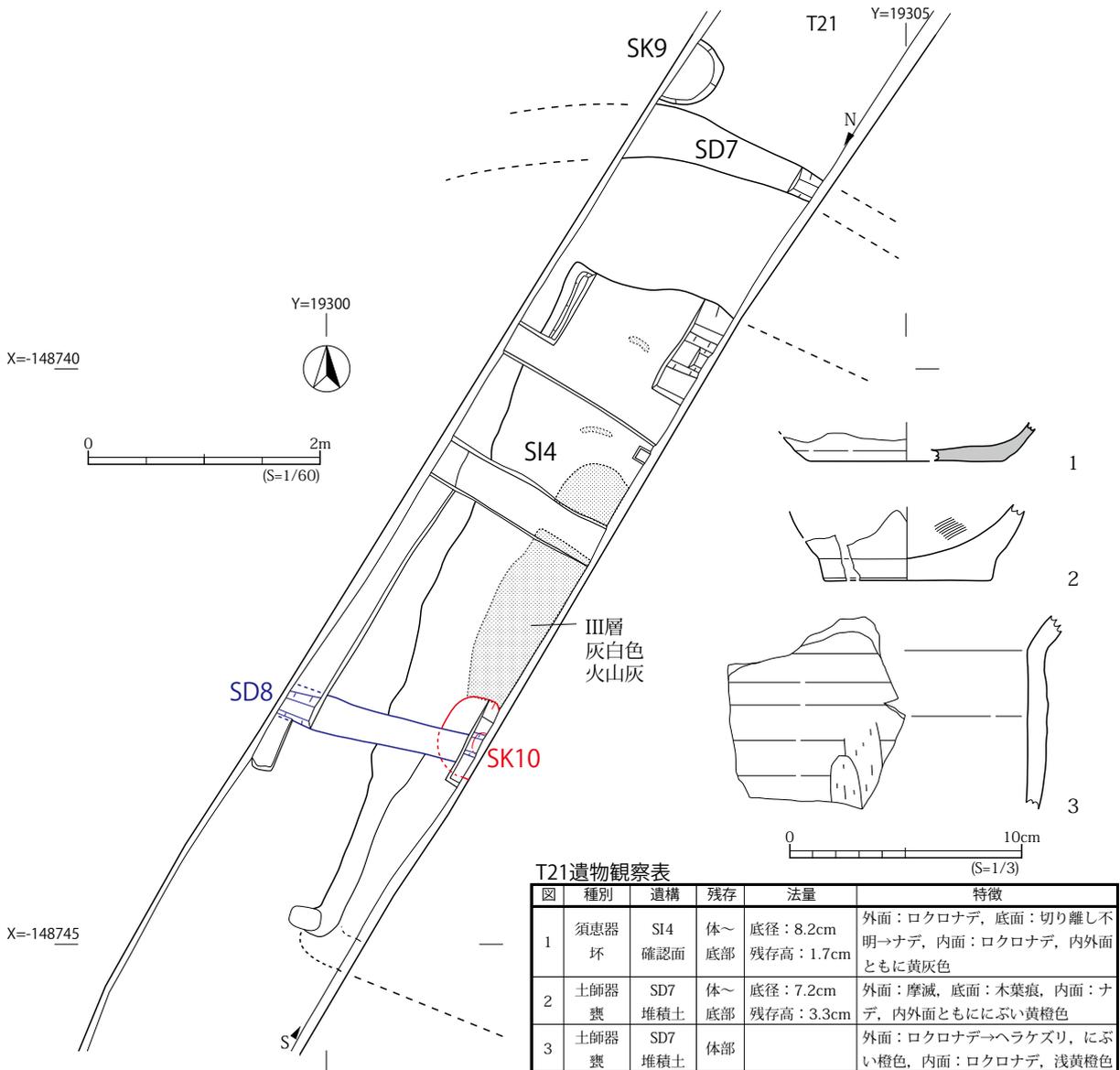
SI2遺物観察表

図	種別	遺構	残存	法量	特徴
1	須恵器 坏	SI2 確認面	1/2	器高：4.3cm 口径：13.4cm 底径：7.6cm	外面：ロクロナデ。 底面：回転ヘラ切り。 内面：ロクロナデ。 内外面ともに灰白色、火漣痕あり。

図版 18 SI1・2 竪穴建物跡, SD5 溝跡



図版 19 SI3・13 竪穴建物跡，SD6 溝跡



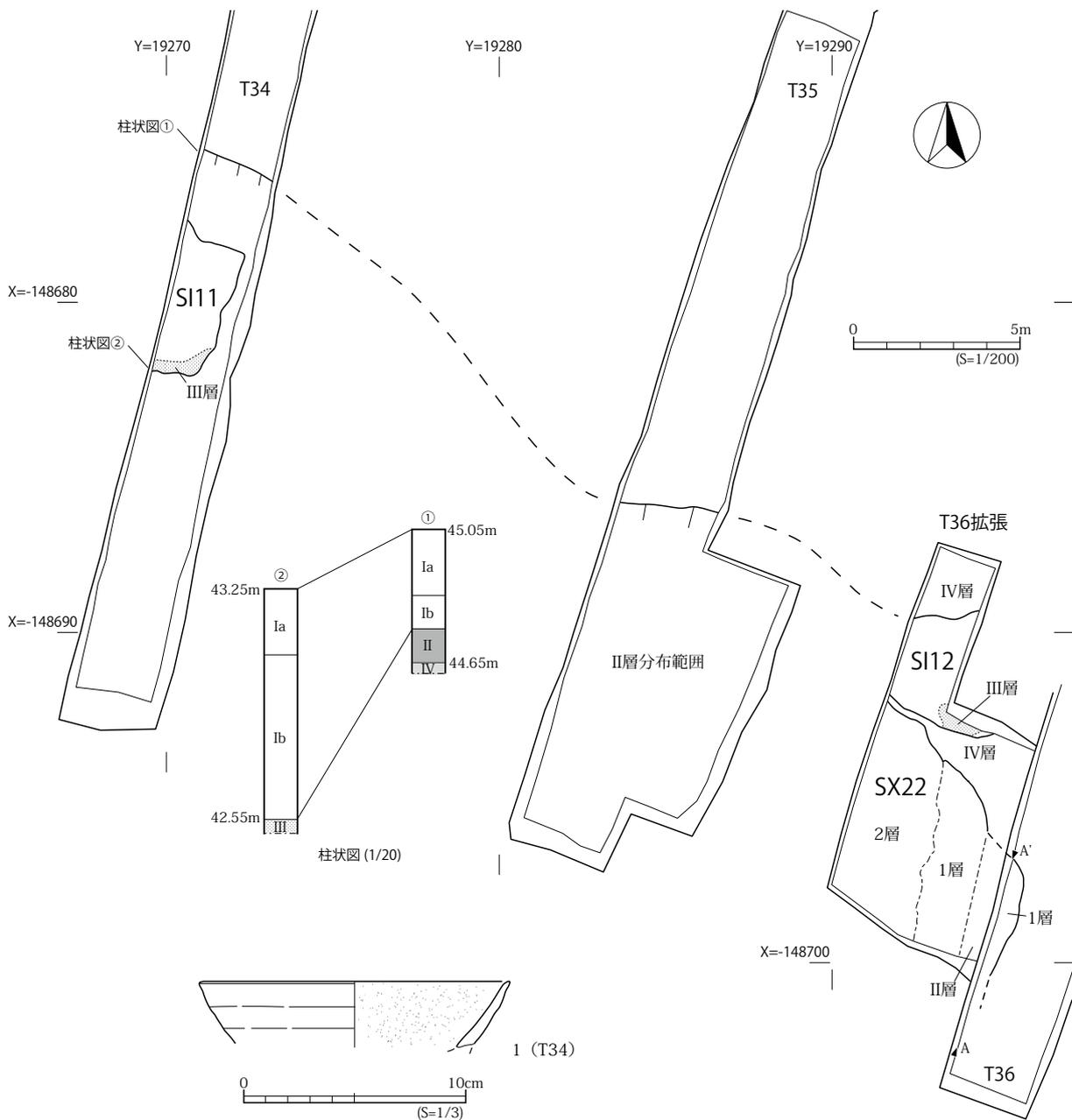
SI4土層観察表

層	土色	土性	特徴等
1	灰黄褐色10YR4/2	シルト	地山中ブロックを斑状にまばらに含む
2	灰黄褐色10YR5/2	シルト	
3	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	
4	黒褐色10YR3/1	砂質シルト	
5	にぶい黄褐色10YR5/4	粘土質シルト	
6	灰黄褐色10YR4/2	シルト	地山中ブロックをまばらに含む
7	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	周溝堆積土
8	褐灰色10YR4/1	砂質シルト	地山中ブロック，小ブロックをまばらに，炭粒を若干含む，周溝堆積土
9	明黄褐色10YR6/6	粘土	褐灰色シルトを縮状に，黒褐色土を斑状に含む，堀方埋土
10	明黄褐色10YR7/6	粘土	堀方埋土

SD7・SD8・SK10土層観察表

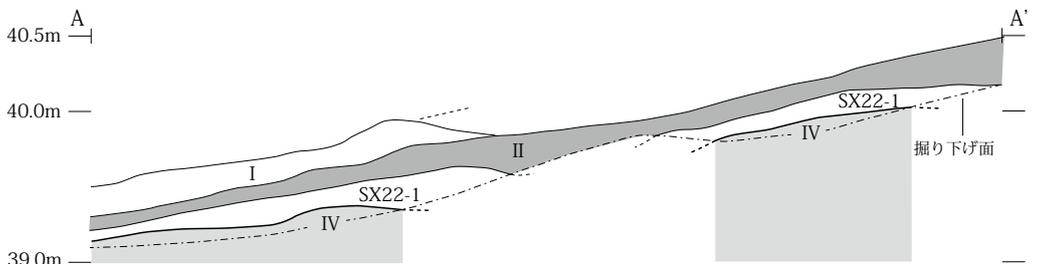
層	土色	土性	特徴等
1	暗褐色10YR3/3	シルト	炭粒を若干含む
2	灰黄褐色10YR4/2	シルト	地山中ブロックを微量含む
3	黒褐色10YR3/2	シルト	
4	にぶい黄褐色10YR5/3	砂	
1	黒褐色10YR3/2	シルト	炭粒，灰白色火山灰小ブロックを若干含む
2	黒褐色10YR3/1	シルト	黒褐色土中ブロック，灰白色火山灰中ブロック，地山中ブロックをまばらに含む
1	灰黄褐色10YR4/1	シルト	灰白色火山灰粒を若干含む
2	灰黄褐色10YR4/1	シルト	灰白色火山灰を多く含む
3	灰黄褐色10YR4/1	シルト	地山粒を若干含む

図版 20 SI4 竪穴建物跡，SD7・8 溝跡，SK9・10 土坑



T34遺物観察表

図	種別	出土位置	残存	法量	特徴
1	土師器 環	T34 確認面	口縁 -体部	口径：14cm 残存高：3.0cm	外面：ロクロナデ，内面：黒色処理？ 摩滅，内外面ともに黄橙色

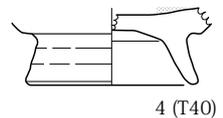
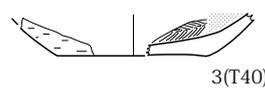
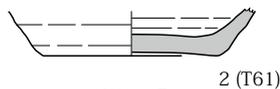
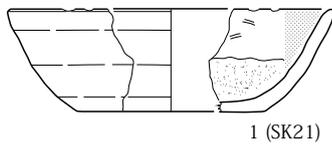
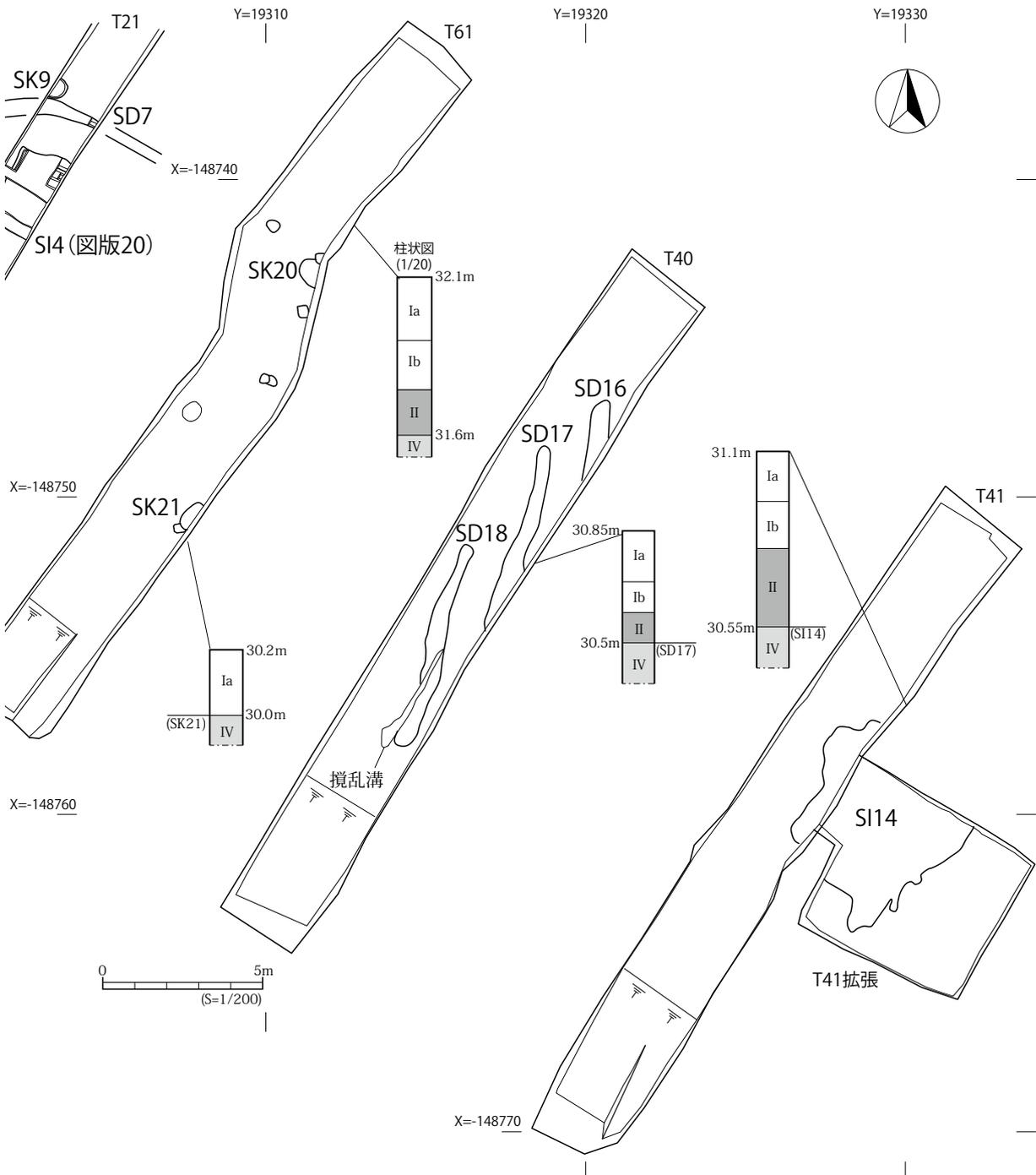


SX22土層観察表

層	土色	土性	特徴等
1	暗褐色10YR3/4	シルト	5cm大の炭化材多く含む，焼土塊少し含む
2	黒色10YR2/1	シルト	10cm大の炭化材密に含む，焼土塊含む

図版 21 SI11・12 竪穴建物跡，SX22 炭堆積層

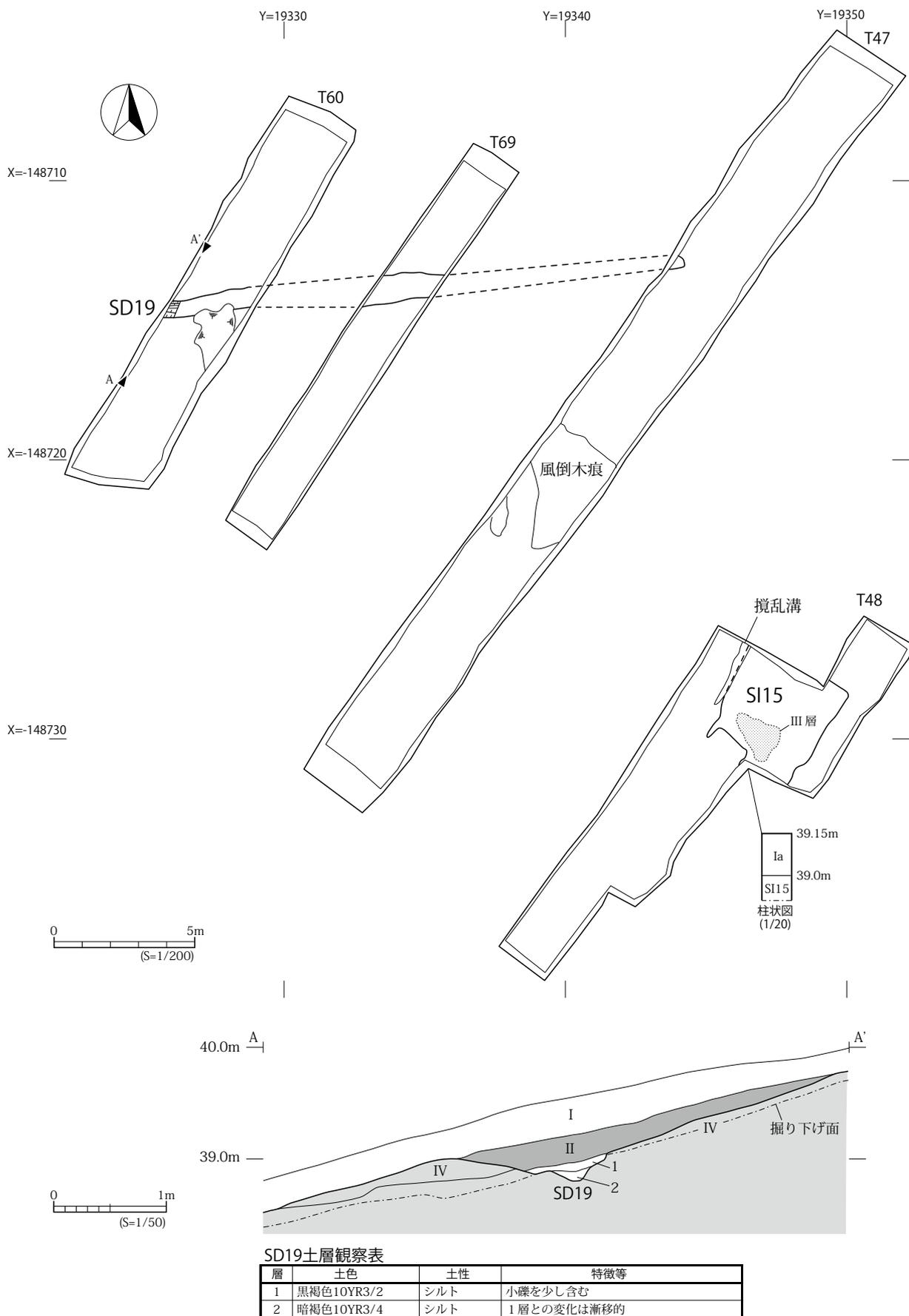
3. 坂ノ下浦I遺跡



T40・T61遺物観察表

図	種別	出土位置	残存	法量	特徴
1	土師器 坏	SK21 確認面	1/5	口径：12.8cm 底径：7.4cm 器高：4.1cm	外面ロクロナデ，黄橙色，底面：切離し・調整不明，内面：ミガキ？・黑色処理（摩滅・剥落顕著）
2	須恵器 坏	T61 廢土	体～底部	底径：7.0cm 残存高：1.9cm	外面：ロクロナデ，底面：回転糸切無調整，内面：ロクロナデ，内外面ともに黄灰色
3	土師器 坏	T40 II層	体～底部	底径：6.0cm 残存高：1.7cm	外面：回転ケズリ，黒褐色，底面：回転糸切，内面：ミガキ・黑色処理
4	土師器 高台坏	T40 II層	体～台部	台径：6.8cm 残存高：3.1cm	外面ロクロナデ，浅黄橙色，内面：ミガキ・黑色処理

図版 22 S14 竪穴建物跡，SD16～18 溝跡，SK20・21 土坑



図版 23 SI15 竪穴建物跡, SD19 溝跡

3. 坂ノ下浦 I 遺跡



1 調査地点 (南東から, 平成 30 年度)



2 調査地点 (西から, 平成 30 年度)



3 T1-SI1 検出状況 (南東から)



4 T5-SI2 検出状況 (南東から)



5 T6-SI3 調査状況 (南西から)



6 T21-SI4 調査状況 (南から)



7 T34-SI11 検出状況 (南東から)



8 T36-SI12, SX22 検出状況 (南東から)

写真図版 8 坂ノ下浦 I 遺跡調査写真



1 T39-SI13 検出状況 (北から)



2 T41-SI14 検出状況 (南から)



3 T48-SI15 検出状況 (南から)



4 T60-SD19 断面 (東から)

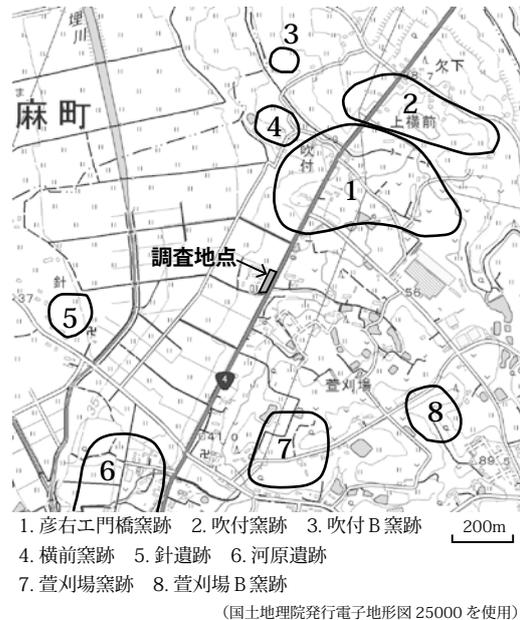


5 出土遺物 (1～12は縮尺1/3、13は縮尺2/3)

写真図版9 坂ノ下浦 I 遺跡調査写真と出土遺物写真

## IV. 彦右工門橋窯跡近接地

所在地：宮城県黒川郡大衡村大衡字萱刈場  
 調査原因：国道4号線大衡道路拡幅計画に係る試掘調査  
 調査主体：宮城県教育委員会  
 調査担当：初鹿野博之，齋藤和機，佐藤渉  
 調査期間：平成30年10月22日～10月24日  
 調査面積：144㎡（対象面積約4,000㎡）  
 調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所，大衡村教育委員会，地権者8名



図版 24 調査地点と周辺の遺跡

### 1. 調査に至る経緯

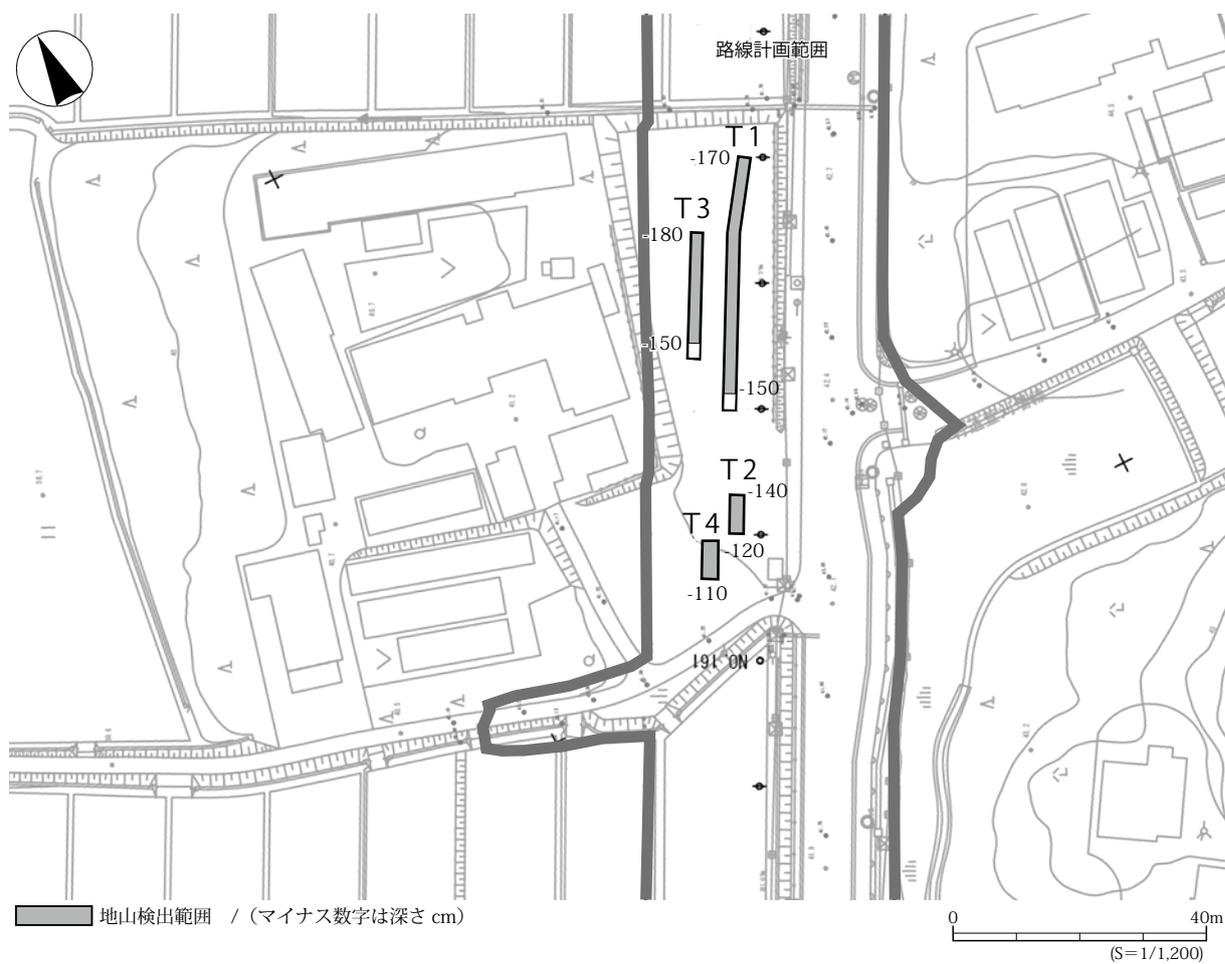
黒川郡大衡村では、村内を南北に走る国道4号線の4車線化が計画されており、平成29年10月30日付けで、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所長から埋蔵文化財との関わりについて協議書が提出された。これを受けて、平成30年3月に宮城県教育委員会と大衡村教育委員会で事業区間約4kmを対象に分布調査を実施した結果、用地内にある河原遺跡（県遺跡地名表搭載番号26007）、彦右工門橋窯跡（26010）、吹付窯跡（26011）、など5遺跡の発掘調査が必要と判断した。一方、今回の試掘調査地点は彦右工門橋窯跡の約200m南、河原遺跡の約700m北に位置する微高地で、周知の遺跡範囲には含まれない。分布調査の結果、遺物も採集されなかったが、周囲の水田より比高が1～2m高く、彦右工門橋窯跡と類似する地形とみられた。周辺にはこのほかに萱刈場窯跡なども存在し、8世紀から9世紀にかけて須恵器を主体に生産した「大衡窯跡群」として知られる地域内にあるため、この地点にも窯跡などの遺構の存在が想定された。そこで、この微高地部分を中心として、南北両側の水田域も含めた4000㎡を対象に、地権者の承諾を得て試掘調査を実施することとした。

### 2. 調査の概要

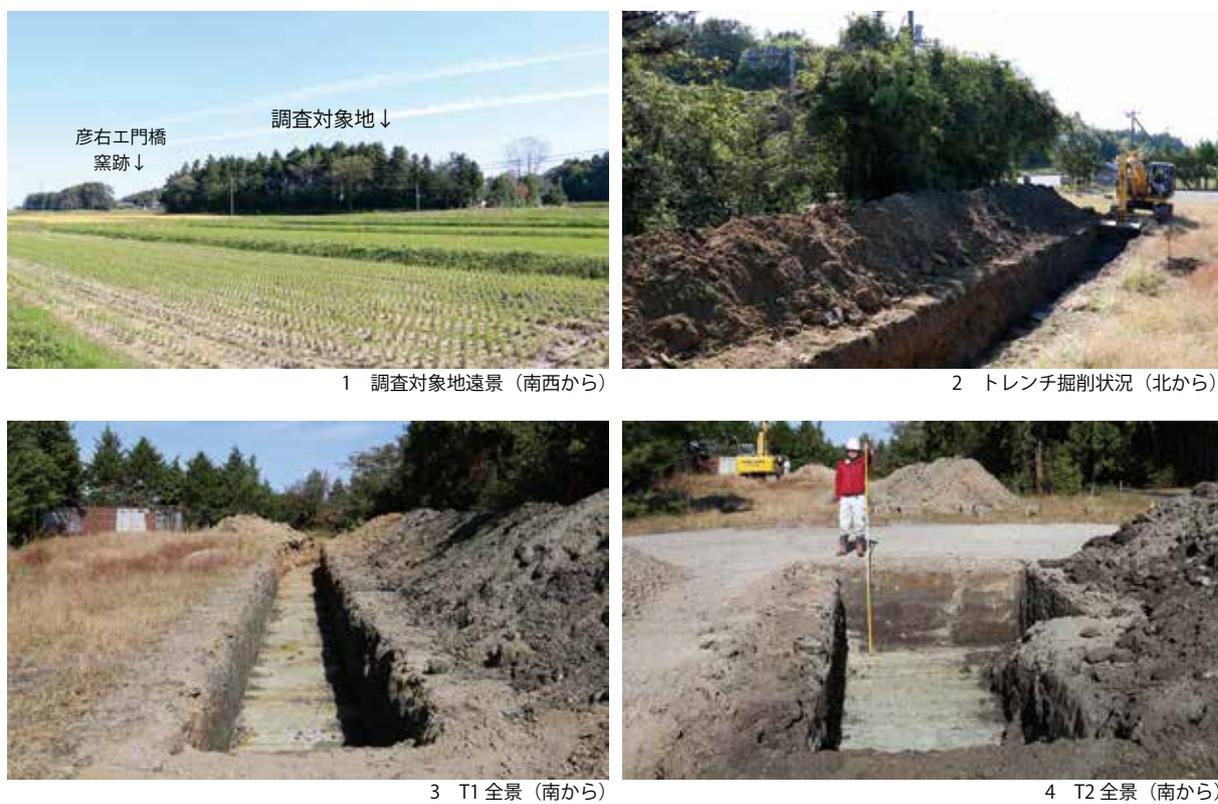
調査地点周辺は、東側の丘陵部に西側から多数の沢が入り込む地形を呈している。国道4号線は丘陵の西側縁辺を通り、その西側に広がる水田地帯は南流する埋川に向かって徐々に標高が低くなる。調査対象となる微高地は東側から水田域に延びた丘陵先端の一つとみられ、現況では空閑地（西側は宅地）となっている。標高は41～43mで、南西側に若干低く傾斜している。

調査は空閑地に4本のトレンチを設定して行った。重機で掘削したところ、いずれも深さ1～1.5mまでは盛土で、その下に水田耕作土とみられる厚さ約0.2mの黒色土、さらに下からグライ化したシルト質の地山を検出した。地山はほぼ平坦で、開田の際に周りの水田と同じ高さに削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。このため、南北両側の水田域についても調査の必要性はないと判断し、トレンチを埋戻して調査を終了した。対象地点については4車線化の事業に支障はない。

なお、トレンチの平面図は事業用地杭から巻尺で測定し、縮尺1/500で用地図面に書き入れた。写真撮影はデジタルカメラ（2020万画素）を使用した。



図版 25 彦右工門橋窯跡近接地調査地点



写真図版 10 彦右工門橋窯跡近接地調査写真

ふりがな	いりのさわいせきほか							
書名	入の沢遺跡ほか							
副書名	—平成 27～30 年度埋蔵文化財発掘調査— 入の沢遺跡・市川橋遺跡・坂ノ下浦 I 遺跡・彦右工門橋窯跡近接地							
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 251 集							
編著者名	齋藤和機(編)・初鹿野博之(編)・鈴木啓司・高橋透・須田正久							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8-1 TEL:022-211-3684							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
いりのさわいせき 入の沢遺跡	くりほらしつぎだてあざじょう 栗原市築館字城生 のいりのさわ みねざし 野入の沢, 峯岸	04213	41071	38 度 45 分 37 秒	141 度 2 分 6 秒	A:2015.10.5～12.14 B:2016.8.1～8.5 C:2016.11.21～ 2017.2.28	A:180㎡ B:100㎡	A:一般国道4号線建設 B:重要遺跡確認 C:遺跡保護
いちかわぼしいせき 市川橋遺跡	たがじょうし いちかわ 多賀城市市川 あざなかやち 字中谷地	04209	18008	38 度 18 分 20 秒	140 度 58 分 46 秒	2016.1.12～2.19	1,022㎡	遊水地造成
さかのしたうらいち 坂ノ下浦 I 遺跡	くりほらし せみね 栗原市瀬峰 あざさかのしたうら 字坂ノ下浦	04213	46034	38 度 39 分 25 秒	141 度 03 分 31 秒	2017.8.21～10.27 2019.2.18～3.18	2,743㎡	太陽光発電所建設
ひこえもんばしかまあと 彦右工門橋窯跡 近接地	くろかわぐんおおひらむら 黒川郡大衡村 おおひらあざかやかりば 大衡字萱刈場	04424	-	38 度 29 分 59 秒	140 度 53 分 8 秒	2018.10.22～24	144㎡	一般国道4号線建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
入の沢遺跡	集落・横穴墓・塚	縄文・古墳・ 古代・中近世		掘立柱建物跡・ 土塁跡・溝跡・ 積み土		土師器・石器・石製品・玉類・炭 化米		
市川橋遺跡	集落・都市・屋敷	縄文～中世		遺物包含層		弥生土器・石器		
坂ノ下浦 I 遺跡	集落	縄文・古代		竪穴建物跡・ 溝跡・土坑		土師器・須恵器・縄文土器・石器		
彦右工門橋窯跡 近接地	窯	古代		なし		なし		
要 約								
入の沢遺跡	調査は平成 27・28 年度に実施した。平成 27 年度は一般国道 4 号線築館バイパス建設計画の変更協議のため、この集落域の北側に遺跡北東部を対象に分布・確認調査を実施した。その結果、古墳時代から古代とみられる横穴墓群、古代の土塁跡・溝跡・掘立柱建物跡、中近世とみられる塚が展開していることが明らかとなった。続く平成 28 年度には、A 区 SI13 竪穴建物跡の追加調査を実施し、その結果、玉類や炭化米などが新たに出土した。追加調査終了後、同年度中に遺跡保護のため A・B 区の埋戻しを実施した。							
市川橋遺跡	調査は遺跡北西部(多賀城西門前面)で遊水地造成に先立って実施し、その結果、弥生時代中期中葉(榊形囲式期)の土器が多数出土した。							
坂ノ下浦 I 遺跡	調査は遺跡の立地する丘陵の東端から南側斜面にかけて、太陽光発電所建設に先立って実施し、その結果、南側斜面に平安時代前期頃(9世紀～10世紀初頭頃)の竪穴建物跡 9 棟などが検出され、古代の集落が分布していたことが明らかになった。							
彦右工門橋窯跡 近接地	調査地点は彦右工門橋窯跡南西部から枝分かれた丘陵の先端部にある。当該地点が国道 4 号線大衡道路の計画範囲に含まれることから、試掘調査を実施した。その結果、丘陵の延長とみえた地形は、近現代の盛土による造成と判明し、遺跡が調査地点まで延長しないことが判明した。							

---

---

宮城県文化財調査報告書第 251 集

入の沢遺跡ほか

—平成 27～30 年度埋蔵文化財発掘調査—  
入の沢遺跡・市川橋遺跡・坂ノ下浦 I 遺跡・彦右エ門橋窯跡近接地

令和 2 年 3 月 16 日印刷 / 令和 2 年 3 月 19 日発行

発行 宮城県教育委員会

〒 980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号

印刷 株式会社ビー・プロ

〒 984-0011 宮城県仙台市若林区六丁の目西町 4 番 1 号

T E L : 022-288-5301 (代表)

---

---

文化財保護、教育普及ならびに学術研究目的に限り、著作権者の承諾なく本書の一部を複製して利用できます。但し、利用にあたっては出典の明記が必要となります。

写真等の借用にあたっては、宮城県教育委員会（東北歴史博物館）に連絡し、必要な手続きをとって下さい。

本書は長期保存のため、全て中性紙を使用しています。

(紙質) 表紙：レザック 215kg / 本文：マットコート 90kg